
世界は七色に輝いて

五十嵐 柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は七色に輝いて

【Nコード】

N6674L

【作者名】

五十嵐 柊

【あらすじ】

色のついた炎から同じ色の物体を召喚する、炎色召喚術。色つきの炎を身につけ、召喚したい物体を想像し、物体を讃美する讃歌を歌うことで物体を召喚できる特殊な技術、炎色召喚術を習得するために造られた専門学校　フォース学園。そこで行われる、通称・学園戦争とも呼ばれる炎色召喚術を使用した闘いをする学園祭。三年生であるレイシャたちも参加する学園戦争で、突如、世間を賑わす脱獄犯が侵入して　！？　「＜不定期更新中＞／＜一応オ리지ナル作品ですが、細音啓先生の「黄昏色の詠使い」の二番煎じな

小説
>
「

始まる前の白色

レイシャ・ロドンは両目をかたく閉ざし、全神経を脳へ集中させた。

彼女の両手の平には真つ赤な炎がともっている。普通であれば、到底見られない光景である。彼女の両手の平は火傷するどころか、熱で火照ってさえいない。

本来なら瞬く間に彼女を舐め吞み込んでしまう炎も、彼女の両手の平の上でゆらゆらと揺れているだけ。

彼女は脳内に混沌とした赤色の世界を生み出す。真紅よりも濃い赤。何も混ざっていない、純粹すぎる赤色の世界。

それを、花の形へ変化させていく。触れれば切れてしまうほど細く長い糸に紡ぐように、丁寧の花びらからゆっくりと花を構成させていく。

ぱつと彼女の目が開いた。青空のような空色と夕焼けの雲のような桃色を混ぜたかのような、薄紫の瞳は目の前の真つ赤な炎を鏡のように映し出している。

「赤色の炎。美しく咲き誇れ」

可愛らしいソプラノで静かに讃歌を紡げば、赤色の炎はぱつと弾け飛んだ。

代わりに彼女の手の平に現われたのは、燃えるような赤色の薔薇。「よし、成功ね」

左手の平に薔薇を咲かせながら、右手で額に浮かんだ汗を拭うと後ろから乾いた拍手が聞こえてきた。

「一分以内で薔薇を召喚、すごいじゃん」

透き通るような銀髪を翻らせ振り向けば、赤毛の少年　ルナ・カーティスが手を叩いていた。その横では、銀色のストップウォツ

チを掲げた短い金髪の少女 リステイ・ユーラがウィンクを送ってくる。

「まあね。純粋な赤色で薔薇を召喚するのは、簡単だから。……一分以内だったのは、予想外だけど」

リステイが掲げるストップウォッチは四十九秒を指している。正直、一分はかかっていると思っていたのに。

予想よりも上手く行ったことに安堵し、ふう、と息を吐く。

「レイシャ、記念にその薔薇、あたしに頂戴」

「記念ってなんの記念よ。まあ、いいけど」

にこにこ微笑むリステイの髪に薔薇を差し込む。光の奔流のような金色に赤色が映えて、かなり綺麗だ。

「似合ってるじゃん、リステイ」

「えへへ。ありがと」

ルナが褒めれば、リステイはかすかに頬を赤らめてはにかんでみせた。相変わらず、分かりやすい反応だ。

「それよりも、分析お願い」

「はいはい」

リステイはストップウォッチをペンとバインダーに持ち返ると、

記録用紙にさらさらと文字を書き込んでいく。

たった今、レイシャが行ったのは炎色召喚術えんしよくしょうかんじゆつと呼ばれる特殊な召喚術だ。色の付いた炎から、その炎と同じ色の物体を召喚すること

ができる。炎色召喚術に必要なのは、色つきの炎、物体の想像、物体を讃美する讃歌の三つ。どれか一つ欠けても成り立たない、繊細で不思議な技術だ。

「記録者リステイ・ユーラ、実践者レイシャ・ロドン、つと。召喚物は薔薇で、色は赤だけだよね？」

ゆっくりと声に出しながら書き込むリステイに、レイシャは小さくうなずく。

「炎光石使用に丸つと」

えんこうせき

炎光石とは、色つきの炎を作るために使われる石だ。炎色反応フレイムアクションで使われる化学薬品でも色つきの炎は生み出せるが、それを使う召喚士は数少ない。

炎光石は基本となる赤、青、黄の三色に白と黒を足した五色があり、二つの炎を絵の具みたいに混ぜ合わせることができる。基本的に二つで一对であり、火打石のように打ち鳴らして使う。この石から発生した炎は石とまったく同じ色をしており、熱も持っていないければあらゆる物質を焼くこともない、非常に便利かつ炎色召喚術にはかせない道具だ。

「かかった時間は四十九分。ルナ、ストップウォッチ」

リステイの言葉に、ルナはすつと自身のストップウォッチを差し出した。

「六秒だ」

これは、火をつけるのにかった時間。

「ってことは、四十三秒か。讃歌にかかった時間は二秒くらいだったから、物体の想像にかかった時間は四十一秒だね」

素早く計算し、記録用紙に記録する。

フォース炎色召喚術専門学園。これが、レイシャたちの通う学校の正式名称だ。その名のとおり、炎色召喚術を習得するために造られた専門学校で、十代なら誰でも入学可能。学年は六段階に分けられており、学期末に行われる筆記と実技試験で優秀な成績を収めれば飛び級もできる。

今はそんなフォース学園でもっとも多い授業である、実技授業の時間。

実際に物体を召喚し、炎色召喚術に必要な三つの作業にかかった時間をひとつひとつ分析する。そして、どこに時間がかかっているのか見直し、さらに早く高度なものを召喚できるように訓練する、基本的な授業。

「赤一色だったのに火をつけるのが六秒ってのは、ちょっと長いな」

「そう、だね」

記録用紙に視線を落しながら、ルナの批評を静かに受け入れる。ルナの言うとおり、一色の炎をつけるのに五秒をオーバーするというのは、遅いほうだ。事実、今回は火種を作るのに時間がかかってしまった。もっと早く付ければ、もっといいタイムが残せたかもしれないのに。

「でも、四十九秒はいいタイムだよ、レイシャ」

「そうだね。この薔薇もとっても綺麗だし……って、あれ？」

リスティは薔薇を褒めようと髪に差し込まれた薔薇を手に取りうとしたが、その手は空を切った。あれあれ？ と何度か薔薇を掴もうとするも、結果は同じ。

「無駄よ、リスティ。とっくに消えてる」

「ええー。残念」

レイシャが肩をすくめて見せれば、リスティは本当に残念そうな声を上げた。その反応に、少しだけ嬉しいような恥ずかしいようなくすぐったい感覚にとらわれる。

炎色召喚術で召喚したものは、すぐに消えてしまう。消えるまでの時間は召喚したときの状況にもよるが、長くても三十分たてば完全に塵と化す。もともとイレギュラーな物体が、長くとどまれるはずがないのだ。

始まる前の白色？

「そういえば、ケイとサージユは？」

ついさつきまで、少なくとも自分が手に炎をともしたときまではいた友人の姿を探し、レイシャは視線を彷徨わせた。

「ああ、二人なら学園戦争のチームわけ見に行ったよ。さつき、放送入ったから」

「そっか」

学園戦争。大層な呼ばれ方をされているが、立派な伝統あるフォース学園の学校祭だ。基本色となる五色のチームに分かれ、その勝敗を争う。戦争と言っても実際に殺しあうわけではなく、炎色召喚術を使って五つのチームが闘う行事。毎年少なからず怪我人は出るようだが、死者が出たことない。まあ、死者が出たらその年で中止になってるか。

「去年はリステイと俺が青で、レイシャたちは黒だったっけ？」

「そうね。ついでに言うところ去年は、わたしとケイが白で三人は赤だった」

「去年も一昨年も二人と三人で分かれてるのかあ。今年もそんなふうに分けれると一番いいけどね」

リステイは祈るように手をあわせた。

学園戦争のチーム分けは学園戦争開催日のちょうど一ヶ月前に行われる。つまり、今日からちょうど一ヶ月後が学園戦争だ。そして、チーム分けから学園戦争までの一ヶ月間はいつものクラス編成ではなく、チームカラーによってクラスが編成される。よって、このチームわけは開催日だけでなくそれまでの一ヶ月間、大きな意味を持つてくるのだ。リステイじゃなくても、仲のいい人と同じチームになるように祈りたくもなる。

「……あ、帰って来たぜ、二人」

ルナが指差す方向へ目を向ければ、ブラチナ・ブロード白金髪の少年　ケイ・エミ

ツティアと黒髪おさげの少女　サージュ・レミがころなしか肩を落としてこちらへ歩を進めていた。

まさか、と嫌な予感がよぎる。

「おかえりなさい！　チーム分け、どうだった？」

リステイは無邪気な笑顔を二人に向ける。二人は気まずそうに視線を交差させた後、無言で五色の炎光石のペンダントをレイシャに押し付けるように渡した。

「ご、五色？」

その色の多さに戸惑いつつも受け取れば、銀色に輝く鎖チェーンがジャラリと金属特有の音を立てた。

学園戦争開催日とそれまでの一ヶ月は、チームカラーの炎光石のペンダントを携帯することが決められている。チーム発表と同時に配布されるそれが、五色全部揃っているということは……。

「全員、ばらばらだったの？」

恐る恐る問えば、二人は項垂れるように一度だけうなずいた。

途端、空気がどんよりと重くなる。

「僕が白、サージュが黄、ルナが黒、リステイが赤、レイシャが青だった」

一人ひとりにペンダントを差し出すケイの声も、やっぱり沈んでいる。

「残念ですけど、六回もあれば一度はこういうこともありますって。確率の問題ですし。……まだ三回目ですけど」

サージュがフォローを入れたが、それはあまり意味を持たなかった。

ころなしか、彼女の緩く編んだみつあみも萎れているように見える。

「……諦めるしかないか」

自分のチームカラーと同じ、憎らしいほどに青い空に一つ、溜息

を零した。

青色の使い道

「あ、カナンも青色だったんだ。よろしくー」

「よろしく、レイシャ」

チーム発表の翌日から特別編成クラスでの授業が始まる。

レイシャは同じチームにそれなりに仲のいい亜麻髪の少女　カナン・リベリスを見つけて、ほっと安堵したように微笑んだ。

横、座っていい？　と一応たずねれば、小さなえくぼを見せてうなずいてくれた。

「あり？　他の四人はいないの？　仲良しグループなのに」

「ああ、他の四人ねえ……」

目の上に手をかざしてあたりを見回しながら問うカナンに、レイシャは気付かれないように溜息を零した。

レイシャ、リステイ、ルナ、ケイ、サージユの五人組は実技授業でも一緒に班を組むほどの仲であり、学年内でも有名な五人組だ。

自然、レイシャの他に誰もいないと不思議に思う人もでてくる。

「残念なことに、みんなばらばらの」

「あ……」

自分が地雷を踏んでしまったことに気付いたカナンは、慌てて口元を押さえたが、もう手遅れ。

「見事に五人が五色に分かれたわ」

こればかりはどうしようもないんだけどね。

いつもどおりの口調を心がけたが、自然と落ち込んだトーンになったことは自分でも分かった。

「そう、それは残念ね。まあ、こういうこともあるわよ。ほら、チーム分けてランダムなんだし。それに、ほら、後でお互いにチームの裏話とか聞けて楽しいかもよ？」

必死にフォローし、励まそうとするカナンに、レイシャは口元をゆるめた。

「そうね。まあ、このクラスも一ヶ月だけだし」

首から提げた深海のように真つ青な炎光石のペンダントを弄りながら、取り繕うように笑みを見せた。

教室の窓から差し込む光にペンダントをかざすと、光が差し込んで明るみと透明度が増す海みたいに青がやわらかくなり、ゆらゆらと水面のように揺らめく青色の影が出来た。

「そっいえば、レイシャって青色は初めて？」

「うん、そうだよ。カナンは？」

「わたしも初めてなんだよー。あーあ、誰か青色だったことがある人がいれば、青色の使い道訊けたのにー」

ぺたん、と机に伏すと、自身のペンダントを指先で弄る。

学園戦争におけるチームカラーは、ただチームを構成するためのものだけではない。学園戦争中の炎色召喚は、チームカラーの炎を使ったものでなくてはならないのだ。

青色のチームだったら、青の炎だけを使った炎色召喚か、青の炎に何かの色の炎を混ぜた炎色召喚しか出来ない。そのため、チームカラーの言うのは大きな意味を持つてくる。

「これから講義もあるわけだし、先輩からも色々聞けるっしょ。大丈夫だって」

カナンにそう言いながらも、レイシャは青色の炎色召喚で何が呼び出せるか考えた。

去年、一昨年は低学年だったこともあって先輩に護られてばかりだったし、すぐリタイアしちゃったからあんまり青の炎色召喚、見てないかも……。それよりも、あんまり学園戦争のこと覚えてないや。

これまでの学園戦争の記憶から探ろうとしたが、自身の記憶力のなさから無理だと悟り、レイシャは苦笑にも似た表情を浮かべた。

青色の使い道？

不意に頭上で軽やかなメロディーが奏でられた。フォース学園のチャイムだ。

ざわざわとしていた周りが波が引いていくみたいにだんだんと静かになって、立っていた生徒は各自、空いている席が事前に確保しておいた席に座っていく。

レイシャとカナンが座っているのは階段教室の一番上の席なので、教室全体がよく見える。

フォース学園の灰色の制服を着て、腕または制服の一部に三年生の証である？という文字が入った腕章を付けた生徒がまだ教師のいない教卓を見つめたり、後ろや横を向いておしゃべりを楽しんでいる。かくいうレイシャも、横を向いておしゃべりの真っ最中だった。

「わたし、一番強いのもって黒色だと思うのよ」

「それまたなんで？」

「ほら、黒って白と混ぜれば金属を召喚できるじゃない。金属があれば、武器だって作れるし」

「確かに」

「カナンはどう思う？」

「わたし？ わたしは……、赤かなあ。火って一番強くない？ 温度を上げれば金属なんて溶かしちゃうもの」

チームカラーの五色のうち、どの色が一番強いのか、そんな議論の真っ只中。実質、色の組み合わせ次第で召喚出来るもののレパートリーは無限と広がるし、使い方次第でなんとでもなるので、一番強い色なんて存在しないのだが。もっとも、そんな色が存在していたら学園戦争の勝者チームは毎年その色だ。

二人の会話がどんどん盛り上げていったとき、前方の扉が滑る

音がした。一気に教室内は静まりかえる。会話に夢中で反応が遅れた二人も、周りが静かになったのに気が付くとすぐに口を噤んだ。

教室に入ってきたのは、薄い水色のスーツを着た若手の女性教師。ふわふわとカールした金髪を低い位置で二つ結びにした、おっとりとした印象を受ける教師だ。

「あ、あのせんせ、美術部の顧問だよ。確か、六年生担任の」

こそこそと小声で耳打ちするカナン。

「そうなの？ 何度か見かけたことはあるけど」

彼女にあわせ、レイシャも小声で応答した。

「クレア、号令をお願いできるかしら？」

「あ、はい。……きりーっ！」

最前列に座っていたクレアという女子生徒が教師に頼まれると、間延びした機械的な号令を口にする。それにあわせ、生徒は全員椅子から立ち上がる。

「礼ー」

機械的にお辞儀して、

「着席ー」

がたん、と音を響かせて着席する。

女性教師はざっと生徒の顔を確認すると、可愛らしい、ふんわりとした笑みを浮かべた。この人、結構、童顔だと、どうでもいいことを思う。

「わたしはユナ・ネーアと言います。普段は六年生を担当していますが、この一ヶ月は青色の三年生を担当することになりました。短い間だけど、よろしくね」

短い挨拶の後に、ぱちぱちと拍手が送られる。

見た目から受ける印象どおりの可愛いソプラノと口調は優しい先生のそれで、心の奥で嫌な先生が担当になったらどうしようと思っていたレイシャは、少しだけほっとした。

「時間があれば、一人ひとり自己紹介をしてもらいたいところだけど、時間が惜しいからさっそく講義に入ります」

ユナ教師は手に持っていた参考書や資料の中からプリントを引張り出すと、それを最前列の生徒にその列の人数分だけ配った。

「第一講義は青色を使った炎色召喚にはどんなものがあるかのおさらいから。基礎中の基礎だけど、基礎がしっかりしていなければ何も出来ないから、ちゃんと聞いててね」

青色の使い道？

配られたプリントには、大きな太字で「蒼炎^{そうえん}で召喚できるモノ」というタイトルが付けられており、その下に細かな字でびっしりと例が書かれている。

「このプリントはタイトルどおり、青色の炎で召喚できるモノの一例をまとめたものよ。この他にも召喚できるものはあるけど、最低限としてこれくらいは召喚できるようにすること」

ユナ教師はそう言いながら、二枚目のプリントを配っていた。冊子にでもまとめればいいのに、なんて思いながら前の人が差し出したプリントを無言で受け取る。二枚目のプリントは「蒼炎召喚物の使用例」と題され、下に使用例が書かれていた。

「まず、一枚目のプリントを見てね」

上にきていた二枚目のプリントをのけ、一枚目のプリントに視線を落とす。

「さつきも言っただけど、これくらいは召喚できるようにしておくとかかなり便利よ。そこに書いてある水や氷塊はもちろんのこと、それを応用した霧なんかも役に立つわ」

召喚物例の一番上には、青色の炎を使った炎色召喚の基本中の基本である水や氷塊などが載っている。

レイシャは召喚物例をなんとなく目で追った。

水や氷塊のほかにも、ユナ教師が言ったように霧なども載っている。青に黄を混ぜて緑にすれば植物も呼び出せるし、黒を少し混ぜれば氷のように冷たく鋭い槍なども出来るらしい。

青色ってあんまり好みじゃないから、よく分かんないや。

基本的に、レイシャは黒と赤を好んで使う。好戦的で、実践向きだからだ。

「じゃあ、次は二枚目のプリント。これは、召喚物の使用例をまとめたものよ」

レイシャがユナ教師の言葉を聞き流して一枚目のプリントに目を通しているうちに、話は二枚目のプリントまで及んだようだ。

「青色は実戦向きじゃなくて弱い……なんて印象を持つ人が多いようだけど、それは違うわ」

ユナ教師の言葉に、レイシャは俯いていた顔をあげた。顔をあげたのは、ちゃんと授業を真面目に聞こうという気になったからではなく、彼女も「青色は実戦向きじゃなくて弱い」と思っている一人だから。

「プリントにも書いたとおり、青色は破壊することに優れているの」プリントに視線を戻す。確かに、タイトルの下に「蒼炎色召喚術の特性：破壊に優れている」と書かれていた。

破壊に優れている？ …… どういう意味よ、それ。

「青の代名詞はなんといっても、水や氷よ。氷……つまり、何かを凍らせることに優れているのよ。プリントのように、黒色と白色で呼び出した金属の武器なんかも凍らせれば粉碎できるから」

「はい、はい、ユナせんせ」

唐突にカナンが挙手した。驚き、レイシャは思わず挙手する彼女をわずかに見開いた薄紫の双眸で見つめる。

他の生徒の視線も、カナンに集中している。

「何かしら？」

「赤色の火炎の前では無力だと思いまーすっ！」

確かに、赤く燃える火炎の前では氷など無力だろう。じわりと溶かされ水になり、じゅうつと水蒸気になって終わりだ。

もっともなカナンの意見。しかし、ユナ教師は片目を瞑り、右の人差し指を左右に振った。ちつつち、とでも言うように。

青色の使い道？

「青色の召喚が氷だけだとか、そういったことに囚われてはいけませんね。水も基本的な青色の召喚物の一つです。これについては青色が破壊に優れているとはいえませんが、火を消すのは水。水を召喚して消化すればいいだけです」

しごくもつともな意見である。火を凍らせるのはどだい無理な話でも、水で消すのは可能だ。というか、火を凍らせるという発想より一般的だ。

「それに、水で消火しなくても氷塊を召喚し、その氷塊を熱を利用して一気に水蒸気にさせれば、視界を遮ることも出来ます。また、青色の炎色召喚を使わずとも、その炎に炎色反応で使用する薬品を投入すれば、それを使いあらたな炎色召喚をすることだって可能です」

自分たちが思いつきもしなかった考えに、教室のあちこちで感嘆の声が上がる。さすが教師、伊達に経験はつんでいない。

プリントを使った講義は順々に進み、しばらくすれば頭上に軽やかなメロディーが鳴り響いた。メロディーがなった瞬間、教室内の空気が一気に緩くなる。教室内がざわめきだし、中途半端な説明だったユナ教師は小さく溜息を吐いた。

「じゃあ、今回の講義はこれで終わりにします。次は実技の時間だったと思うから、休み時間中に中庭に移動しておくように」

第二講義、実技授業。広すぎる、と言うのが一番伝わりやすいくらいにただっ広い中庭でレイシャたち三年生の青色チームは炎色召喚の実技をしていた。

しかし、レイシャは中庭にある大きな木の下で、一人ぼうつとしていた。

さて、どうしたものかな……。

実技の授業は、必ず三人から五人で一つの班を組む。普段のクラスならば、いつも一緒にいる五人で一班だったのだが、五人が五人とも別々の色に分かれるという最悪の事態で、レイシャと一緒に班を組む人が見つからなかった。決して友達が少ないというわけではないが、こういう班は打ち合わせなどしなくても普段の交友関係で自然と固まってきてしまっている。そこに図々しく入る勇気も、それを寛容に受け入れてくれるほど親しい友達も持ち合わせていないだけだ。

ふと、少し離れた場所に見知った影を見つけた。カナンだ。カナンの他にもう一人いるようだが、それ以外に人はいない。

もしかして、自分と同じ状況かな。まあ、一人ぼっんという自分よりはいいけどね。

「カナン、よければ一緒に班組んでくれない？」

「あ、レイシャ。ちょうど良かった！ 班なら喜んで。こっちも一人、足りなかったのよー」

控えめに申し出れば、彼女は屈託のない笑みでうなずき、引き寄せるように腕を引っ張った。

「彼女はレイシャ・ロドン。クラスメイトなの」

カナンが自分を紹介する相手。つまり、カナン以外の一人は黒髪に金色のエクステを入れた、どちらかといえばちゃらちゃらした感じの少年だった。

「……どうも」

彼から視線をそらさず、ぎこちなく頭を下げる。

彼はレイシャの姿をその緑色の瞳にみとめると、ふうん、と短い声を漏らしただけで、それ以上の反応はしなかった。

「で、レイシャ。こっちはロイ・アーウィン。母方の従兄弟なのよ」

ロイ・アーウィン。どこかで聞いたことのある名前だ。同学年なので聞いたことがあっても不思議ではないのだが、同級生との会話で耳にしたというよりも、もっと大きなところで耳にしたというか。

「ええと、ロイ、よろしく」

「よろしくー。あんた、可愛いね」

一応同じ班なんだし、と笑顔を向けてみる。そうすれば、見た目相応の軽い言葉が返って来た。

え、と言葉を詰まらせれば、それを楽しむようにロイは目を細めた。

「はい、そこ！ いちゃいちゃしないで早く召喚をしましょ。見たところ、わたしたちの班が一番遅いようだから」

青色の使い道？

「召喚の順番、どうする？」

「ジャンケンでいいんじゃないの？」

ロイの言葉で、中央に三つの拳が突き出される。

「じゃーんけーん、ぽんっ！」

お決まりの歌のような言葉にあわせて、拳が各々の形に変化する。

「わたしの勝ちだね」

結果はレイシャがチヨキ、その他がパーだった。

「じゃあ、レイシャさん、一番最初にどうぞ。俺ら、記録しますんで」

ロイが銀色のストップウォッチを掲げ、カチカチと音を鳴らして遊ぶ。それに笑いながらうなずき、二人から五歩くらい距離を取る。安全のために、召喚物の大小に関わらず、炎色召喚をする際は他人と一定の距離を保たなくてはならない。

「何を召喚するの？」

「んー、何を召喚してほしい？」

問いに問いで返すと、カナンは苦笑した。訊きかえしてどーすんのよ、とでも言うように。

何を召喚するか、まったく決めていなかった。青のチームの授業なので、やっぱり青色を使った炎色召喚をしなくてはならない。しかし、青色でわざわざ練習するような奴ってあったかなあ……。

沈黙の幕が下りる。

しばらくして、ロイが控えめに挙手した。何？ と視線で問いかければ、

「俺、さっき先生が言ってた、水蒸気の奴みたい」

第一講義でユナ教師が言っていた、氷塊を水蒸気にして目くらましに使う技術を見たいという。

「それって、火炎の召喚もいるんじゃないの？」

「じゃあ、わたしが火炎、召喚するよ」

カナンが笑顔でこちら駆け寄り、制服のベルトにつけていた赤色の炎光石を取り出す。

「じゃあ、いきまーす」

軽やかに宣言し、カツンツと高い音を立てて赤色の炎光石同士をぶつける。ばおつと音を立てて燃えるように手の平の上に現われた真紅の灼くことのない炎。

それを確認すると、目の前の少女はそつと目を伏せた。

火炎の召喚は基礎中の基礎。そんなに時間をかけずに召喚できる。ほんの五秒。五秒間、脳内で召喚物のイメージを描く。そして、普段の彼女からは想像できないくらい静かな声音で讃歌を紡ぐ。

「赤色の炎。遅しく燃えろ」

ぱつと真紅の炎が弾け、かわりに真紅よりも落ち着いた色合いの炎が生まれた。

「おおつと」

炎色召喚によって生まれた炎は当然のごとく、熱を持っているしモノも焼く。カナンは自身の手が火傷する前に手を引き、地面に火種を落とした。燃やすモノを見つけた炎は舐めるように広がり、レイシャとカナンを隔てる低い壁のようになった。

これは早くしないと小火騒ほやぎになるな。

レイシャは首から上げた青色の炎光石を打ち鳴らし、青色の炎を手の平のうちに生んだ。ガスバーナーの炎よりも海よりも空よりもずっとずっと青い、炎。

脳内に、青く澄んだ、冷たい氷塊を思い描く。細部まで丁寧に思い描き、不意にいまだ、と思うようなタイミングがある。それにあわせ、讃える歌を歌う。

「青色の炎。冷たく凍れ」

青い炎の代わりに現われた、小さな氷の礫たち。なるべく早く蒸発するように大きさを小さめにし要と試みたが、力不足か氷の粒は自分が想像したのより少し大きかった。

まあ、いつか。これでも成功するかもしれない、と割り切り、燃え盛る炎の上に降らすように、勢いよく氷の礫を撒き散らす。

青色の使い道？

が、氷の礫たちは水蒸気になる前にぱちぱちと音を立てる炎に飛び込み、消えた。

ある意味、当然といえば当然の、当たり前といえば当たりの結果。

「あつれえー？」

ロイが首をかしげ、間の抜けた声を出す。

炎は何事もなかったかのように燃えている。めらめらと、ぱちぱちと。

「失敗？」

「そうみたい。って、火、消さないと！」

冷静にうなずいたものの、地面を舐めつくすように燃える炎は自身と力ナンを呑み込む寸前まで迫っていた。慌てて後ろに飛び退き、着地と同時にもう一回、炎光石をぶつけ合う。

物体の想像を手短に済ませ、こんなところでお間抜けに事故死しないように早口で讃歌を発する。

「青色の炎。涼やかに散れ」

燃える炎を消化するための水を撒く。じゅうつ、と炎が消える音がして、炎は次第に小さくなっていき、やがて消滅した。

ふう、と額に浮かんだ汗を手の甲で拭う。

「炎色召喚で呼んだ炎なんか、放っておけば消えるのに」

「そんなの待ってたら、わたしたちは黒こげになってるわよ！」

足元に炎が迫っていたにも関わらず、呑気な力ナんに怒鳴ったとき、

「そうね」

不意に知った声が聞こえてきた。声の主はユナ・ネーア教師。頭で理解するとともに振り向けば、レイシャのすぐ後ろに彼女は立っていた。

「さつき、わたしがいったことをやろうとしたのね」

人好きのするにつこりとした笑みを添えて言うと、指導者の顔つきになり、炎色召喚のアドバイスをする。

「今回は炎に対して氷の粒が少なかったかな。あと、粒が大きかった。氷から液体を介さずに水蒸気にする、昇華をしなくてはならないんだから、粒は極力小さい方がいいわ。目くらましにするんだったら、たくさんの水蒸気が出るように粒も多くしなくちゃ」

地面の炎が燃えた焦げ跡に目をやり、そしてレイシャの顔をじっと見ながら言う。

「そうですか」

「ええ。でも、この技は三年生には少し難しいかも。結構、炎の状況によってどんな氷を召喚するのか見極めなくちゃいけないから」
「フロローするような言葉にレイシャが大きくうなずいたとき、少し離れた場所から「せんせー！ ユナせんせー！」とユナ教師を呼ぶ声が聞こえた。

「はあーいっ！」

ユナ教師は大きく返事をする、レイシャたちに向かい、頑張つて！ と励ましの言葉を贈り、ぱたぱたと駆けていった。
その背中をぼうつと見送り、はっと我に返る。

「よし！ なんか悔しいからもう一度やるよっ！」

制服の袖を捲り、よしつと気合いを入れる。それを見て、カナンが呆れたように苦笑した。

色を生み出す透明

「そんな感じで、何発も炎色召喚をしたおかげでわたしはヘトヘトなんですよ」

「そりゃあ、おつかれさん」

昼休み、カフェテリアにて。

いつものメンバーは、いつものテラス席で昼食を取っていた。チームが分かれ、各講義の教室が離れてしまっても暗黙の了解のように昼休みにはテラス席に集ったレイシャたち。

レイシャはぐったりとテーブルに伏しながら、プラスチック製のカップを傾けて中のバニラシェイクを吸った。冷たいシェイクが流れてきて、口の中をほどよく冷やす。冷たくて甘い塊をゆっくり嚥下すると、だるそうな動作で頭を起こす。

あの後、レイシャとカナンは五回ほど同じ炎色召喚を行った。が、結果は同じだった。レイシャたちが無駄に疲れ、地面に黒い跡が多く残ったただで成果は何一つ得ることが出来なかった。

「それよりも、みんな、明日の午前は暇？」

優雅な貴族みたいにお上品に紅茶を啜りながら、ケイが訊ねる。

瞬間、他の四人は一斉に脳を回転させて明日の午前の予定を確かめた。

「わたし、暇ー」

明日は土曜日。土曜日は半分のクラスが午前授業で、残りの半分のクラスが休みとなる。確か、青チームは講義が休みのはずだ。

「ごめん、あたし、講義ある」

フォークに付け合せのニンジングラッセを突き刺したまま、リステイがぼそぼそ言う。どうやら、赤チームは明日も講義らしい。

「俺、暇だぜー」

元気よく拳手するルナ。が、

「え、嘘！ ルナは講義あるって。だって、先生、明日は赤と黒が午前授業だって言ってたもん！」

ニンジングラッセが刺さったままのフォークを揺らしながら指摘するリスティ。

「そうなの？　じゃあ、暇じゃねえ」

一瞬、ルナはきよとした表情になったが、リスティが言うなら間違いないだろうとでも思ったのか、残念そうに肩を落とした。講義日程くらい把握しておきなよ、という四対の視線が彼に向けられる。

「わたくしは多分、空いていると思います」

ふわふわとしたオムレツをこくと咽喉を可愛らしく鳴らして呑み込んでから、サージュ。

サージュはどうしてこうも可愛らしくオムレツを食べられるのだろう。なんか、サージュにはすでに女子としての何かが敗北している気がする。

「じゃあ、リスティとルナ以外？」

「その言い方止めてくれ。虚しくなる」

よほど残念だったのか、ルナは不貞腐れたようにコップいっぱいに注いだ炭酸がきついレモンスカッシュにストローを勢いよく刺した。すると、水圧でストローの中からレモンスカッシュが一筋、ぴゅゅつと飛び出した。

「のわっ！？」

驚いて身体をのけぞらせると、ガタンツと軽いプラスチックの椅子が大きな音を立てる。

「落ち着きなさいよ、ルナ。で、ケイ、みんなの予定聞いてどうするのよ？」

ルナに呆れが混ざった冷たい一瞥をくれてやり、ケイに視線を向ける。

「薬品倉庫に炎色反応で使う薬品があるか見に行こうよ」

色を生み出す透明？

「薬品倉庫オ？ そんなところ行つて、何するんだよ」

気を取り直してレモンスカッシュを嚼るルナが、訝しげに訊ねる。薬品倉庫とは、その名の通り薬品が保管された倉庫だ。校舎裏にある二階建ての建物で、教師の許可さえ取れば自由に出入りするこ
とが出来る。

炎色召喚術で使う色の付いた炎は大抵の場合、炎光石によつて作るが、色がついた炎であれば何でもいいので炎色反応で引き起こした炎を使う人もいる。フォース学園でも炎色反応で引き起こした色の炎で炎色召喚するという講義があるので、薬品倉庫にはかなり豊富な種類の薬品が保管されている。

「学園戦争で使うかもしれないじゃん。だから、下見だよ、下見」
「えー。そんなの、使わないって」

当然と言つた様子で答えるケイに、今度はリスティが訝しげな声を上げた。

「でも、過去に使つた人いるって聞いたことあるけど」

レイシャはじゅうつと音を立ててバニラシェイクを吸いながら、ケイに助け舟を出す。

「あ、わたくし、その噂聞いたことあります。去年か一昨年の卒業生らしいですよ」

サージュが言えば、二人はへえと納得したようないないような微妙な声を漏らした。

「でも、下見くらいなら行つといて損はないかもね。学園戦争中はいつ炎光石が割れてもおかしくないから」

炎光石は一度割れてしまえばもう使えない。硬さは石と硝子の間くらいで、乱暴に扱えばすぐに割れてしまう。派手にアクションしたり、小さな隙間に隠れたりすることが多い学園戦争中は気付いたら割れていた、なんてことがよくある。

そうになったら、予備の炎光石を使うか、他の色でやりくりするか、炎色反応で引き起こした色の炎を使うしかない。もし、炎色反応を行うとしたらその薬品の在り処を知っていなければならぬ。そう言った意味では、決して無意味な行動ではないだろう。

「そうそう。今日の講義で、担当の先生から言われたんだよ」

にこやかに言うケイに、約二名がふうーんと気のない生返事をする。なんだかんだで、一緒に行けないことを拗ねているらしい。

子供っぽいというか、なんというか……。

「話は変わるんだけどさ。誰か、ロイ・アーウィンって名前聞いたことない？ 三年の青なんだけど、実技授業で同じ班になってから気になってさー」

ストローを口にくわえたまま、ももごと喋る。

ロイ・アーウィン。第二講義、実技授業で同じ班になってからずっと気になっていた。その名前を、どこかで聞いたことがあるような気がする。

「ロイ・アーウィン？ それって」

「ええええっ！」

ルナの言葉がリスティの叫びによって遮られる。

リスティはいつになく興奮状態で、落ち着きがない。

「どうしたの」

「ロイ・アーウィンって学園長の息子じゃない！ レイシャ、なんでそんなこと知らないのよ。てか、ずっと気になってたって何！？ 恋心抱いちやっただって奴？ そうなの、レイシャ、この際思い切って白状しなさいっ！」

早口で一気に言い切ると、びしっとフォークをレイシャの方へ向ける。突然、鋭く尖った凶器を目の前に突きつけられ、レイシャは反射的にのけぞった。

「落ち着きなさいって。別に恋心抱いたとかそんなんじゃないって、

ただ聞いたことある名前だなーって思ったから気になってただけだから。あの人、学年長の息子なんだね」

フオークを取り上げて、誤解を解く。

そういえば学園長の姓もアーウィンだったな、と今更になって思いついた。

「じゃあさ、カナンは学園長の親戚なの？」

「カナン？ カナン・リベリスですか？」

サージユの問いに首肯する。

「そういえば、彼女、ロイの従姉妹ですよ。なら、そうなるんじゃないですか」

「でも、そんなこと聞いたことないけど」

「ロイみたいに息子ならともかく、親戚って言ったって何の自慢にもならないからな。わざわざ言ったりしねえんじゃないの」

ふうん、と生返事をする。

不意にケイの後ろにかかった壁時計に目を向けた。

午後十二時五十分ちよいすぎ。あと十分足らずで午後の講義が始まってしまふ。って、ん？ 十二時五十分？

「ああーっ！」

今度はレイシャが叫ぶ番だった。丸まりがちだった姿勢が一気にしゃんとし、椅子がガタツと乾いた音を立てる。

突然の叫びに四人はわずかに目を見開いて驚いた。

「昼休み、終わっちゃう！」

「え。もうそんな時間？」

レイシャが叫んだ事実には四人はまず驚き、それから壁時計を見た。何度見ても針は十二時五十分をすこしすぎたところを示している。

気付けば、カフェテリアには自分達以外まばらにしか人影はなかった。大半の生徒はもう昼食を済ませて移動したのだ。

「おい、急ぐぞっ」

ばたばたと忙しく響く足音が五つ。講義室の並ぶ二階に向かって響いていた。

色を生み出す透明？

午前八時五十五分、フォース学園本校舎裏薬品倉庫前。レイシャがそこに着いたときにはすでにケイとサージユがいた。

「おはよ」

「おはようございます」

「おはよう」

土曜日ということもあって、三人は私服だった。ただし、フォース学園生ということを示す学年の数字が入った腕章は身に着けていたが。

サージユはいつもは緩く編んでいるみつあみを解いており、ゆるく癖のかかった黒髪を二つに結んでいる。手には講義などで使用する資料を持っており、落ち着いた服装と相まって図書館で勉強してきた優等生という感じがする。

ケイの方もいつもはコンタクトをはめているが、今日はシャープな縁の眼鏡をかけており、普段と受ける印象が大分違う。

なんなんだ、この優等生コンビ。

「てか、二人とも早いね」

「そうですかあ？ 普通だと思いますけど」
にこやかに、サージユ。

いやいや、サージユさん、集合時間は九時のはずですけど。

「それよりも、早く中に入ろう。倉庫前でいつまでもいると不審者みたいだし」

倉庫内は、ひんやりとしていた。

薬品倉庫は二階立ての筒状の建物で、光に当てると変色したりしてしまう薬品のために電気や窓はない。扇状に棚が配置され、数多くの薬品が保管されている。扉から少しの範囲は吹き抜けになって

おり、そこから上を見上げると天井がすごく遠いところにあるのが分かる。

倉庫内は非常に暗いため、炎色召喚で光を呼び出す必要があった。ペンライトでも持ってこればその必要はなかったのだが、仕方ない。それぞれ、持っていた白色の炎光石を手にすると小さく打ち鳴らす石と石がぶつかりあう音が、反響^{エコー}する。

手の平に現われた純白の炎。暗闇の中にぼうつと浮き上がり、少しの範囲ならこれで見渡すことが可能になった。

「光なんか呼び出さなくても、炎のままで十分じゃない？」

雪のように白い炎見ながら、炎色召喚を行うのが面倒な気がしてそう言えば、

「面倒くさがらない」

ケイから内心を読み取ったかのような返事が間髪いれず寄越された。

むう、と少し唇を尖らせて見せる。

「レイシャがいいなら、それでもいいんじゃないんですか。白色の炎。明るく照らせ」

笑いながら言うサージュだが、次の瞬間には既に讃歌を歌っていた。炎が弾け、代わりに小さな光の球体があわられる。

仕方なく、レイシャは溜息を吐くとともに白く発光する球体を呼び寄せた。

「僕、二階の方行ってくるよ」

言い終わる前にケイは階段を上がり始めていた。カンツカンツとブーツと金属の階段が共鳴する高い音が倉庫内に響き渡る。

「あ、わたしも二階^{うえ}の方いく。一階^{した}の方は講義のときに一通り見たことあるし」

ケイを追いかけ階段を駆け上がると、やっぱり音が反響した。

薬品は専用の容器に入れられ、その容器小さな木箱に入れられて

いる。木箱には薬品名と元素記号が記されており、一目で中の薬品が分かるようになっていた。

上の方は台に上らないと届かないくらい高い棚にずらりと木箱が並んでいるというのは、ある意味壮観。

レイシャは特に何かを探すわけでもなく、なんとなく光の球によって照らされるそれぞれの木箱に記された薬品名を見ながら奥に進んでいった。

ケイに誘われて来たものの、目的がない。サージユみたいに資料でも持ってこればよかった、と少しだけ後悔した。

何気なく棚の上の木箱に目を向ける。

ストロンチウム
Strontium 元素記号：：Sr

銀白色をした、アルカリ土類金属の一つ。炎色反応で赤を示すため、赤色の炎光石の代用として使われることが多い。

へーえ、こんな場所にあるんだ。薬品倉庫で保管されている薬品は優に百を超える。その為、どこに何が保管されているのかはここを頻繁に利用する化学専攻教師でも把握できていないだろう。当然、講義で何度か訪れたことがある、という程度のレイシャには何がどこにあるのかまったく分からない。

時間はあるんだし、他に炎色反応で使える薬品も探しておくか。

思い立ったら即行動。レイシャは今までばうつと眺める程度だった木箱を、一つ一つじっくりと見ながら更に奥に進んだ。

色を生み出す透明？

サージユ・レミは講義用の資料を片手に一階を歩いていた。

何か役に立つかと思ひ資料を持ってきたのだが、そこに書かれて
いることのほとんどがすでに暗記済みであつたことに小さく息を漏
らした。

開いていた資料と閉じ、棚の木箱へと視線を走らせる。

ふわふわ浮遊する白光のおかげで、木箱に貼られた紙に記された
文字までしっかりと見える。

『ソディウム Sodium クロライド Chloride 元素記号：NaCl』

塩化ナトリウム。ナトリウムの塩化物で、塩または食塩と言われ
ることが多い。塩酸と水酸化ナトリウムの中和によつて得られる、
白色または無色の八面体の結晶。

確か、ナトリウム系なら炎は黄色になつたはず。

サージユは自身のチームカラーの炎を生み出す結晶の在庫を確か
めようと木箱に手を伸ばし……、止めた。

木箱に貼られた紙のすぐ下に「在庫なし」と手書きで書かれたテ
ープが貼つてあつたからだ。

……実験で使われたのでしょうか。化学の実験で使用されることの
多い塩化ナトリウム。使用頻度が高いということは、無くなるのも
早いということだ。

「他に黄色の炎になるものを探しましょ」

ぽつりと呟くと、ナトリウム系の物質を求めて奥へと歩を進めて
いった。

光源の白い光がぱつと弾けるように消えた。

その事態にレイシャは一瞬驚き慌てたが、すぐに召喚保持時間が
過ぎたのだと理解すると自身を落ち着かせるように肺の中の息を吐

き出した。

光の球体が消えると、闇の帳が彼女を包み込む。目が慣れたせいか棚に並ぶ数多の木箱くらいなら確認できるが、そこに貼られた紙の文字まではさすがに見えない。

すぐ近くには友人がいる。そう頭では分かっているけど、この背の高い棚に囲まれた暗い空間ではここに存在するのは自分だけ、という錯覚に陥ってしまう。

レイシャを包む闇。不安と孤独を煽るものだと、本能的に思う。独りではないはずなのに、独りだと感じる。

そういえば昔は、いつもこんな感覚と隣り合わせだったっけ。今でこそ友人と呼べる存在がいるものの、昔、まだフォース学園に入学する前、六年間の初等部時代、レイシャはいつも独りだった。別に性格が暗かったとか、いじめられていたとか、嫌われていたとかそういうわけじゃない。

ただ、浮いていただけ。

勉強はいつも上位で、運動も出来た。でも、それが、いけなかったんだと思う。なんでも簡単にこなしてしまっていたから。いや、こなしてしまうように見えていたから。

なんとなく、距離を置かれていた。話しかければ答えてくれるし、必要ならば話しかけてくれる。けど、やっぱりどこか距離を置かれていた。

そして、レイシャ自身、距離を置いていた。

性格が暗かったとか、いじめられていたとか、嫌われていたとかそういうわけじゃない。

ただ、浮いていただけ。

浮いていたから、いつも独り^{ひとり}だった。

今は独りじゃない。

けど、人付き合いは苦手だ。友人関係は狭く深くで、狭く深くの範囲に入っていない相手には、どこか顔色を伺って距離を置いている気がする。

暗かった視界の端に、淡い光が進入してきた。レイシャはまだ光を呼んでいない。その光はつまり。

「あれ、レイシャ、明かりはどうしたの」

白い光を伴った、ケイ。

その姿に、小さく笑みを零す。

「今、召喚するところよ」

大丈夫。わたしは独りじゃない。

蜜色の日常と灰色の暗雲

学園戦争が一週間後に迫ったある日、世間は一つのニュースによって大きく揺れていた。

カフェテリアに集ったいつもの面々の会話も、当然のようにその話題から始まった。

「あのモルテ・ダンテが脱獄したんだってな」

「それ、朝のニュースで言っていましたあ」

モルテ・ダンテ。終身刑を架せられている重罪人で、今朝、脱獄していたことが明かされた。

炎色召喚術には不可能なことが一つある。生命召喚、つまり動物や人間の召喚だ。

しかし、モルテ・ダンテはそれに成功した。史上初の生命召喚成功者となったのだ。

それは、炎色召喚の歴史的には大きな一歩だったことには違いない。

生命召喚は医療に応用できる。軍事用に生み出され実戦に特化した炎色召喚術を医療にも使用できるようになったという、大きな一歩。

生命召喚の初の成功者というだけなら、彼は炎色召喚術者の中の大スターになっただろう。なのに、彼は終身刑を架せられるほどの重罪人になった。

彼の召喚するものは、全て非人道的なものだったから。

心臓を破壊しない限り行き続ける生命や狂ったように他の生物を殺し続ける動物を、彼は召喚したのだ。

それにより、モルテ・ダンテは歴史に名を残す大スターから歴史に名を残す重罪人へと堕ちた。

同時に生命召喚は禁忌になった。

それが約三年前のこと。

そして、彼が重罪人となつてから約三年後の今日、重罪人モルテ・ダンは脱獄した。

色んな意味で世間を揺るがせた人物。ただ脱獄したというだけで、世間はおもしろいほどに揺れる。

「わたし、久しぶりに聞いた。モルテ・ダンテって名前」

「確かに」。捕まつてからはあんまり聞かなかったもんね」

リスティが、いかにも化学調味料を使っていますと主張するような鮮やかな色のメロンソーダをストローでかき回しながら同意する。鮮やかな青緑に浮かぶ透明の氷がガラス製のコップに当たってカチヤカチヤと涼しげな音を奏でる。

「でも、モルテ・ダンテって今まで不可能な生命召喚をするくらいだからかなり頭いいだろうね」

「それ、多分、頭いいって言うより狂人^{マッド}って言うんだと思う」

そう？ 目で問いながら、じゅっといつもものバナシエイクを口に含む。冷たくて甘い味が口の中に広がると、お昼なんだなあという感じがしてくる。

「まあさ。重罪人が脱獄しようとかしようと、俺らの日常^{せいかつ}は変わんねえじゃん？ 世間も騒ぐだけ無駄だよな」

頬杖を突きながら、呆れたような調子で言うルナ。

確かに、重罪人が脱獄しようが何しようが自分達の生活は変わらない。

朝起きて、学園に来て、居眠りしそうになりながら講義を受けて、お昼にみんなと喋りながら甘いバナシエイク吸って、午前よりも強い睡魔と格闘しながら午後の講義受けて、まあ自分は帰宅部だからそのまま家に帰って、それで家族と雑談しながらご飯食べて寝る。その日常という名の平和でなんの変哲もないサイクルは、重罪人が脱獄したなんてことでは乱れない。

「てゆうか、ルナ。頬杖は行儀悪いから止めなっ」

ケイが言いながらルナの手を払う。いきなり支えを失ったルナはそのまま顎からテーブルに衝突した。

「いてっ！」

短い悲鳴に笑いが起きる。ケイは苦笑気味に、サージユはくすくすとお上品に、レイシャは堪えるように小さく、リスティは豪快に声を立てて。

「かつこわるー！」

「うるせー！ 笑うな！」

早くも痛みから復活したルナが羞恥に赤く染まった顔で喚く。蜜のようにあたたかで甘い、自分のいつもどおりの日常。

嗚呼、こんな日常がいつまでも続きますように。

蜜色の日常と灰色の暗雲？

フォース学園職員校舎最奥。学園長室で、男は静かにコーヒーを啜っていた。

猫を思わせる金色の瞳が見つめる先にはどこの家庭にもあるような一台のテレビ。

「今朝、警察庁から終身刑を架せられているモルテ・ダンテが脱獄していたと発表されました。」

流れてくる女性アナウンサーの事務的なソプラノは、今もつと世間を騒がせている脱獄犯のこと。

男は事務的な声を聞きつつも、その心はどこか遠くにあるようだった。どこか、遠くに想いを馳せているような。

不意に部屋の扉がノックされた。小さいがはっきりと響く音に、男の意識は一気に現実に取り戻される。

「学園長、入ってもよろしいでしょうか」

扉越しから掠れた男の声。

「入れ」

聞きなれたそれに、男は手に持っていたコーヒーカップを置いてから短く返事した。

「失礼します」

折り目正しい第一声とは裏腹に陽気な声を放ちながら入ってきた癖のついた赤髪の男。よれた白衣のポケットに手を突っ込んだまま、無遠慮に部屋に踏み入ると傍にあったソファアームに大きな身体を沈ませる。

「……リオ。少しは遠慮したらどうだ」

彼の態度を咎めるように言えば、

「二人のときはいいじゃねえの、別に」

まったく気に留めた様子のない返事を寄越してきた。

リオ・アンダーソン。フォース学園の教頭であり、学園長　ワーカー・アーウィンの幼馴染でもある。

「お前が仕事以外でここに来るなんて珍しい。一体全体、何の用だ」
ワーカーは頬杖を突きながら、リオを見た。普段は威厳に満ちたワーカーであるが、親しい人^{あさなしみ}にだけ見せる、少年のような態度。

リオは黙ってテレビ画面を指差す。モルテ・ダンテについて報道しているニュース番組を。

「モルテが脱獄したってさ」

「そうらしいな」

「どうよ。こうしてかつての級友の名前がニュースに出てる気分は」
リオの視線はテレビから離れない。

わずかな沈黙。一呼吸より少し長いくらいの、中途半端な余韻を残したまま、ワーカーは極力感情を押し殺していつもどおりの声を心にかけていった。

「あまり気分のいいもんじゃない」

「そりゃそうだ」

モルテ・ダンテ。最初で最後の生命召喚成功者であり、脱獄した重罪人。その過去は、ワーカーとリオの級友^{クラスメイト}。

しかし、特別親しかったわけではない。きっと、モルテと特別親しかった人物などいないだろう。

彼はいつだって独りだったから。教室でも、部活でも、どこでも別に嫌われているわけではないが、いつでもどこでも彼は独りだった。

どこか、浮いていた。浮いていて、誰とも交わらない浮雲のような人物。

当時クラス委員でたまたま部活が一緒だったワーカーが勝手に気にかけてただけで、せいぜい、一日一度喋るか喋らないかというほどの仲だった。

「あいつが生命召喚に成功したときも逮捕されたときも驚いたが、

このニュースを見たときは今までで一番驚いたさ」

リオの深い緑色の双眸が細められる。彼も彼で、なにか考えさせられることがあるのだろう。

不意に窓の外へ視線を投げる。

綿菓子を連想させるような白い雲が浮かぶ、青く透き通った空。

太陽が真上に昇り、蜜色の光を降らせる。しかし、西の空。西の方角には、青を呑み込むような灰色が広がっている。

……これは一雨降られるか。

「悪い予感がする」

「悪い感つてのは不思議と良い感より当たっちゃったよなア。…

…せめて、学園戦争は平和に終わるといい」

小さな独り言に返答が来たのに驚きつつも、いつになく真剣味を帯びたりオの声にワーカーはひとまずうなずいておくことにした。

悪い予感が気のせいだということを願う。

黒色の独白

男は廃屋で闇に溶け込むように身を潜めていた。

砕け散った窓。埃が積もる床に散らばる無数の硝子の破片。ベールのように張り巡らされた蜘蛛の巣。黒ずんだ置き物。悲鳴のような軋みを上げる床。埃の臭い。

ホーネットドマンション
幽霊屋敷と呼ぶにふさわしい、荒んだ屋敷。

かつては豪奢だったであろうことが残されたアンティークからよく分かるこの屋敷もこんな荒んだ姿になってしまつとは、盛者必衰、いや、たけき者もついには滅びぬという言葉べきか。

かつては屋敷の住人達で賑わったであろうリビングルームの隅で、男はじつとしていた。まるで、精巧に作られた蠟人形のように。まるで、空気に溶け込もうとしているように。

フードを目深に被った男。その正体は今もとも世間をにぎわす、モルテ・ダンテ本人。

モルテはフードの下、青みがかった灰色の瞳でただ空を睨みつけていた。

もうすぐ、日が落ちる。日はとうに傾き、空は桃色と橙色が混ざったようなあたたかい蜜柑色に包まれている。直に日は完全に落ち、太陽の代わりに小さな銀色の月が精一杯世界を照らそうとするだろう。

モルテの足元の床には一から七の文字が右から左へと刻まれている。すぐ近くには、大きな硝子の破片。きっと、これで数字を刻んだのだろう。

七から四までの数字には上から罰印が付けてあった。

モルテは空を睨むのを止めると、硝子の破片を掴んだ。それで三の文字を横切るように斜線を刻む。左右からそれを行つと、三の文字の上には罰印が刻まれた。

まるで、七からのカウントダウンのよう。

「……あと、二日。学園戦争は明後日にせまった」

ぼつりと。ぼそぼそとした声で呟く。

七から一までの数字。それは、フォース学園の学園戦争までの力
ウントダウン。

そして、同時に復讐へのカウントダウンでもある。

モルテ・ダンテが脱獄した理由。それは、復讐するため。自分を
独りにし、闇に追いやったかつての母校に復讐するため。

去年、学園長を務めていたジャック・アーウィンが逝ったため、
現在はジャックの息子であるフォース学園の学園長はワーカー・ア
ーウィンが務めている。

ワーカー・アーウィン。かつての、級友。

かつての級友が学園長を務める母校に復讐するなんて、なんてい
いタイミング。なんていい状況。

復讐するにはもってこいな状況だ。

モルテはフードの下で、自分でも気付かぬうちに口角を小さく持
ち上げていた。悦びを表すように。好戦的に。獲物を見つけた肉食
獣のように。鋭く、にんまりと。

ずっとずっと待っていた。ずっとずっと暗い監獄の中で。自分に
は似合いすぎるほどの暗い闇が支配する監獄で。

明後日の学園戦争で、脱獄犯による復讐劇は幕を開ける。

五色の闘い、開幕

「それでは、十分後に学園戦争を開始します！」

学園長であるワーカーの合図で、校舎前の広場に集合していた優に二千を超える生徒たちは一斉に散らばった。

赤色の炎光石を首から提げる生徒たちは学園の奥、青色の炎光石を提げる生徒は校舎の右手側、黄色は正門の右手側、白色は正門の左手側、黒色は校舎の左手側へと。

胸元に澄んだ青色の炎光石を輝かせたレイシャも当然、人ごみに流されるようにして校舎の右手側にある青色チームの出発地点へと向かう。

「レイシャっ！　いよいよだよー！」

「うわっ！？」

いきなり後ろから抱きつかれ、レイシャは反射的に声を上げた。

無駄にテンションの高い声の主　カナン・リベリスを一瞥し咽喉の奥で溜息を押し殺す。

カナンの半歩後ろでは、ロイがしつぽを振る仔犬のような無邪気な笑顔を浮かべていた。こちらも、普段に増してテンションが高そうだ。

「相変わらず……、いやいつにも増して元気そうね、カナン」

「そう？　いや、だって、一年に一度の学園戦争だからね！」

咲き誇る向日葵のような明るい笑みを見せる彼女に、レイシャもつられるようにして笑みを浮かべた。

学園戦争。一年の中で数ある学校行事。その中で一番大きな行事、それが学園戦争だ。

みんなの士気というか、テンションが上がるのも分かる。かくいうレイシャも、昂ぶる感情とテンションをポーカーフェイスという仮面で押さえつけているところだ。

午前九時から午後四時までの七時間で、五つのチームがそれぞれ

の炎光石を奪い合うというシンプルなルール。それぞれ首から提げたペンダント型の炎光石を奪い合い、当然、奪われたほうは失格となる。午後四時の終了時刻の時点で失格にならなかった者がもっとも多いチームが勝ち。

炎光石を奪う手段の一つは、炎色召喚術で闘い力ずくで奪うこと。ただし、必ず炎の色は自身のチームカラー単色か、自身のチームカラーに他の色を足した複数色を用いること。

一応、死者を出さないために危険度の高い炎色召喚は禁止されているが、その他には特に禁止事項もなく、炎光石を奪い合うというシンプルで遊戯のようなルールの割りに、もう一種の格闘技のようになる。

学園戦争という一見、危険で物騒な呼び名がつく原因でもある。教師と失格者および怪我人の待機場所である本部は、体育館。校舎は施錠こそされていないものの、学園戦争中は立ち入り禁止となる。

「、それでは、みなさんの健闘を祈ります」

青色チームの待機場所である校舎の右手側で、青色チームの責任教師である男性教師が最低限のルールの確認を行い、とうとう学園戦争の開始合図を待っただけとなった。

教師の話が終わると、途端に生徒がざわめきだす。湧き上がるような興奮を押さえつけるのは不可能だと主張するように。

不意に学園内の至るところに設置されたスピーカーから、ジジジ……と雑音ノイズが漏れ出した。このざわめきの中では聴き取るのが困難なほど微かな音なのに、まるで大声で怒鳴りつけられたかのようにざわめきが止む。

「ただいまから、学園戦争を開始します！」

朗々たる学園長の声は半分ほどかき消されて、レイシャの耳には届かなかった。割れんばかりの歓声によって。

学園戦争開始合図の放送が流れた途端、人の波は動き出した。

それに押されるようにしてレイシャも駆け出す。視界の隅にレイシャとは反対の方向へ駆け出した力ナンとロイの姿が映った。

浮かれる気持ちと呼応するように軽い足取りで向かうは校舎裏。

昨日、レイシャはリストイたちと約束していた。まず、校舎裏に集まろうと。

走りながら、左手に青色の炎を呼ぶ。そして、制服のベルトからぶら下げた四色の炎光石のうちの一色、黒色の炎光石を打ち鳴らす。瞬間、右手に現われた黒色の炎。左手と右手をあわせるようにして、レイシャは海よりも青い純粹すぎる青色と墨汁のように黒い闇のような黒色を混ぜ合わせた。

絵の具と絵の具が混ざるように、すつと溶け融合していく二色。瞬く間に、青色と黒色の炎は青い艶を帯びた黒色の炎へと色を変えた。

「青色と黒色の炎。清流のごとく閃け」

讃歌と唱えると共に、青黒い炎は一振りのサーベルに変わった。

調子確かめるように、サーベルを一閃させる。ビュンツと風を切る小気味いい音が風の鳴き声に混じって鼓膜を揺らした。

校舎裏。ちょうど薬品倉庫の前あたりに、見慣れた赤髪の少年の姿を見つけた。少年は自分に背を向け、突っ立っている。

レイシャは小さく口角を持ち上げると、地面を押し出しようにぐつとつま先に力を入れ、走る速度を上げた。

五色の闘い、開幕？

レイシャに背を向けている少年。

間合いに入っても、こちらに振り向かないどころかぴくりとも動かない。どこがおかしい。罨？ 罨？

ちらちらとそんな考えが頭をよぎったが、それを振り払うようにサーベルと横に薙いだ。

光を受け、鈍色に閃く青黒い刀身。それが少年の身体を切断する。

キィ……イン。

途端、金属と金属がぶつかり合う音が響いた。

見ると、サーベルは少年を切断する寸前で地面から伸びる黒い盾に阻まれていた。……盾？ そんなもの、持っていないかつたはず。自分が斬りかかってからの短い時間で召喚するのも不可能。一体、どこから……？

わずかに目を見開き、動きが停止する。

ようやく、少年 ルナ・カーティスはこちらを向いた。尊大な笑みを、その整った顔いつぱいに湛えながら。

レイシャは、はっと我に返ると後ろに飛び退いて距離をとろうとした。が、それを実行する前に黒い盾は直角に折れ曲がり、鋭い刃となってレイシャに襲い掛かった。

「あ……っ！」

空気を切り裂くように突き進んでくる刃を避けるのは不可能だと瞬時に悟り、なんとかサーベルで受け流す。

しかし、刃の攻撃はそれだけでは終わらない。空中で屈折するように折れ曲がり、突き進んでくる。レイシャはそれを受け流すのが精一杯だった。サーベルと刃がぶつかるたびに高い金属音が響く。

「どうしたよ、レイシャ」

嘲るようなルナの言葉に返事をする暇もなく、刃を受け流していく。それと同時に、刃に押されるようにしてどんどん後退していく。随分と後退したところで、レイシャの視界にルナの影が映った。影……？ ルナの影は、影というには暗い色をしていた。墨汁を零したかのような、漆黒。これは影じゃない。

そして気付く。黒い刃の発生源はその影だということを。つまり、それは。

「黒色の炎色召喚ね！ 影と上手く一体化して、カモフラージュしているようだけど！」

自分が間合いに入っても振り向くどころか、ぴくりとも動かなかった理由。

それはすでに敵を迎え撃つ姿勢だったから。

ようやくその仕掛けが分かった。が、仕掛けが分かればこの状況を打破できるというわけではない。

「お、さっすが、ご名答」

ルナの声は余裕そのもの。さっきからあちらはまったく動いていないのに、自分は動きまくっている。もともと、レイシャよりルナの方が体力面では勝っている。これじゃ、バテるだけじゃないの！ 止むことのない追撃に、じんわりと嫌な額に汗が滲んでくる。

少しくらい怪我を負ってでも、反撃にでるか。

そんな考えが頭をよぎったそのとき。

視界を赤い何かが横切った。

ルナが大きく後ろに飛び退く。それにより、黒い刃もサーベルに届く寸前で停止した。その隙にすかさず後ろに退がり、体制を立て直す。

視界を横切った赤い何かはルナがいた場所に突き刺さっていた。

アーチエリー

赤色の矢。

赤色。この矢を放ったのは、つまり。

「リステイ！ ナイスタイミング」

少し離れた場所に赤色に輝く矢を構えたリステイがいた。

片目を瞑ってみせれば、矢を構えた少女は小さなえくぼを見せて微笑んだ。

「お前、レイシャの味方するのかよ」

溜息まじりのルナに、リステイは意地悪そうに口元だけで微笑む。

レイシャはぐつとサーベルを持つ手に力を込める。青黒いサーベルの切っ先をルナに向けると、ルナも周囲に地面から生える黒い刃を揺らめかせ構えた。

さあ、ここから反撃開始。

五色の闘い、開幕？

清流のように美しく閃く青黒いサーベルを地面から生える黒い盾が防ぎ、赤い矢がサーベルと刃の間に飛んでくる。

レイシャはルナの攻撃を防ぎつつサーベルで斬りかかり、ルナは矢とサーベルと盾で防ぐという防戦一方、リステイは距離を置きつつルナを射ぬこうと矢を番える。

二対一となり一気に余裕をなくしたルナはサーベルと矢を防ぎつつ、反撃する隙をうかがっていた。

しかし、矢を防げばサーベルが襲い来る。反対にサーベルを防げば矢が飛んでくるという、タイミングがいいのか悪いのか分からない攻撃に、どうも反撃するタイミングが掴めない。

黒い盾が全方向からの攻撃に対応できるものでよかったと思いつつ、薙がれるサーベルを服を掠りそうになりながらもなんとか避け、後方から向かってくる矢を盾で防ぐ。

時折、盾を刃に変えてレイシャを襲ってみるものの、いつでも盾に切り替えれるように遠慮している中途半端な刃ではサーベルで容易く受け流されるか、リステイが放つ矢に針路を変えられる。

たった一人の友人の登場で優勢だったのがこうも劣勢になってしまうのか、と小さく舌打ちを零した。

「どうしたの、ルナ。刃にさっきまでのキレがないよっ」

言いながらサーベルを振り回すレイシャには、さっきまでなかったキレがある。

「おまつ、二対一は卑怯だろっ」

光を受けて鈍色に輝くサーベルを避けたり防いだり、空気を裂いて向かってくる真つ赤な矢を避けたり防いだりで、ゆっくりと返事をする余裕もない。

だんだん、息が上がり、漏れる吐息が切羽詰ったものに变化してくる。

「一対一でないと駄目だなんて規則はないはずだよ」
後方から、まったく息の乱れていない軽やかな言葉と一緒に綺麗な孤を描いて飛んでくる赤い矢。それを盾で防いで、前からのサーベルを身を捻って避ける。
動くたびに額に浮かんだ汗が丸い透明の雫になってひらひらと舞う。

流れるように閃き、舞い踊るように薙がれるサーベル。

こいつは本当に綺麗な剣術をしゃがる。まったく、頭もよくて炎色召喚も上手くて運動も出来るってどんなだよ。

悪態を吐きつつ、突きを放つサーベルを避けようと斜め後ろに身を引く。

が、サーベルの切っ先は急に一時停止をしたようにぴたりと止まり、動かなくなった。

「え……？」

レイシャの顔に困惑が広がる。

視線を動かし、見ると、腕とサーベルに緑色の蔦が巻きついていてた。その蔦はレイシャの後方まで広がり、みつあみをした黒髪の少女の左腕に巻きついていてる。

操り人形の糸のように。
マリオンネット

「サージュ、遅いぞ！」

蔦の召喚主に叫ぶと、彼女は困ったように微笑んだ。

「だってえ、黄色はこれから遠いんですもん」

言い訳じみた言葉が返ってくる。

「はーん。サージュはルナの見方するの」

首を捻り後ろを向いてレイシャが皮肉れば、サージュは困ったような笑みをさらに深くした。

「ルナの方が劣勢でしたし、一番近い距離にいたのがレイシャでしたから」

言いながら、ゆつくりとレイシャに歩を進めるサージユ。

「サージユ、動かないで」

途端、ぴしゃりとした声がかけられた。

矢を番えたリステイが矢の先をサージユに定める。

しかし、サージユは臆することも歩みを止めることもなく、ただ静かに空いている右手をリステイの方へ向けた。

右手には、左手と同じように緑色の蔦が巻きつけられている。

「……なに？」

リステイが頭上に疑問符を浮かべる。

しかし、それに構うことなく矢を引き絞り、矢を放とうとする。

矢が放たれる。この場にいた全員がそう思った瞬間、蔦は一気に伸びた。

「あっ！」

疑問符が感嘆符に変わったリステイが急いで矢を持つ右手を離そうとしたが、それよりも早く伸びた蔦が彼女の矢と右手に絡みつく。矢を持つ手の上からきつく蔦が絡み付いているため、矢を放とうにも放てない。

リステイは矢を引き絞ったまま、固まった。

レイシャとリステイ、双方の額に塩辛い汗の雫が浮かぶ。

視界を動かさず視線だけを動かして様子をさぐりつつ、一瞬のうちに逆転した立場に奥歯を強く噛み締める。

「また、逆転だな」

黒い盾を刃に変えたルナが、にいつと好戦的に口角を上げた。

五色の闘い、開幕？

たった一人の登場で、面白いほどに逆転していく立場。

再びルナが優勢になったことに、レイシャは小さく舌打ちを零した。

なんとか腕を動かそうとしてみるが、予想以上に蔦の拘束が強く、まったく動かせない。というより、何もしなくても蔦が食い込んで、かなり痛い。サージュめ、これが終わったら覚えてなさいよ。ルナと自分との距離はかなり近い。

絶体絶命と言っても差し支えない状況に、新たな汗がじんわりと滲んでくる。

「じゃあ、いただくとするか」

余裕の笑みを湛えたルナの手が胸元の^{ペンダント}炎光石へ迫ってくる。このままじゃ、炎光石を取られる……！

そう思ったとき、唐突に背後で何かが斬れる音がした。続いて、蔦の拘束が弱くなり力なく解ける。

「え……？」

最後にサージュとルナ、リスティの驚きの声が耳に届いた。

何が起こったのかまったく理解できなかったが、チャンスだと言わんばかりにレイシャはルナが驚いて動きを止めている間に後退して距離をとった。

十分な距離をとり、それからようやく振り向くと地面に深く灰色にも似た銀色の槍が突き刺さっているのが目に入る。蔦を斬ったのはこれ？ でも、誰のもの？

頭上に疑問符が浮かぶ。

「やあ。僕が一番遅かったみたいだね」

飄々とした態度で現われた、ケイ。

そして、その少年の登場で驚きが納得に変わった。

「貴方の仕業でしたか」

納得と驚きと少しの呆れを含んだサージユの言葉に、ケイは片目を瞑って答えて見せた。飄々と歩み寄り、地面に突き刺さる槍を抜き構える。

「これで全員ね」

「こうなると、もう、チーム戦つっより個人戦になってくるよな」
静かにサージユがリステイへの拘束を解く。

それぞれがそれぞれの武器を構え、臨戦態勢へ。

「わたしが一番不利な状況にいる気がするんですが、気のせいですかね……」

位置的に四方向を四人に囲まれているレイシャ。自然、四人の構えも中心にいるレイシャに向かっていているような形になる。

額の汗が一筋、頬を伝い顎を伝い落ちた。

「随分と久しいな」

かつての学び舎の裏門の前で、フードを目深に被った男はそんな呟きを漏らした。

錆びつき、南京錠でかたく閉ざされた裏門。それを超えて、学園戦争中の生徒たちによるにぎやかな声が飛んでくる。

それに虫唾が走ると言わんばかりに表情をゆがめて、男は裏門に大きく跳躍して飛び乗った。ガタンツと大きな音がにぎやかな校内とは裏腹に閑散とした裏門周辺に響き渡る。

装飾の類が多くついたお洒落なフード付きコートのベルト部分。そこからぶらさがる、五色の炎光石。

男は門の上で直立したまま、左手で白色、右手で黒色の炎を生み出した。静かに両手を合わせれば、溶けるようにして無彩色は混ざっていく。

「白色と黒色の炎。雄々しく食い干切れ」

低く吐き出された讃歌。男が灰色の炎を落とす。炎は空中で質量を一気に増し、召喚物へと姿を近づけながら大きく一回転して着地

した。

血のように真っ赤な目を持つ、灰色の狼となって。

生命召喚。炎色召喚では不可能とされている、人を含む動物などの生命をもつモノの召喚。

それを、この男は軽々とやってのけた。普通の炎色召喚をするように、ごく普通に。

しかし、それも当たり前なのかもしれない。この男 史上初の生命召喚成功者であるモルテ・ダンテにとつては。

灰色の狼はぶるつと一度身震いすると、大きく口を開いた。

そこから何か小さな灰色の物体が這い出てくる。その物体はどんどん大きくなり、同時にどんどん姿を変え、口を開けている狼と同じ、赤い瞳の灰色の狼となった。

顎が壊れそうなほど大きく口を開く狼。そこから這い出てくる狼。あつという間に、たった一匹だったはずの狼が手品のように二匹に増えた。さらに二匹の狼は口から同じ種類の狼を吐き出し続け、二匹が四匹、四匹が八匹と数を増やしていく。

「行け」

狼の数が優に五十を超えたで、モルテは短く指示を出した。

狼たちは大きく遠吠えをすると、それぞれ駆けていく。血を思わせる真紅の瞳をぎらつかせながら。

「ふ……っ」

モルテは嘲笑を零すと、コートを翻らせて地面に降り立ち、ゆっくりと歩を進め始めた。狼と同じようにぎらつく、鏡のように反射する青みがかった灰色の瞳をフードの下に隠して。

五色の闘い、開幕？

体育館。職員や失格者、怪我人の待機本部であるその場所の舞台袖では、いくつもの小さな画面ディスプレイが淡い光を放っていた。

防犯のために校内にいくつも設置されたセキュリティカメラ。普段はセキュリティ管理室に設置されているセキュリティカメラの大本となる機材も、今日の学園戦争で全生徒の行動を監視および把握するために本部である体育館の舞台袖に運び込まれていた。画面が放つ光で暗いのに明るいという不思議な空間で、ユナ・ネーアが画面を見つめている。

「あら？」

不意にユナは疑問の声を上げた。

「誰かしら、これ？」

長方形に設置された小さな画面の右下。裏門を映すカメラに、人影が映っていた。裏門は出入り禁止になっており、使われていない。当然、いくら学園戦争中でもそこに立ち寄る人はいないはず。

ユナは整った眉を潜め、右下の画面を凝視した。

「……どう見ても、生徒じゃないわね」

画面に映る人影は器用に門の上に直立していた。生徒がこんなことできるはずがない。それ以前に、身長や体格から見て大人の男だ。装飾がたくさんついた、お洒落なコート。その腰にぶらさがっているのは、五色の炎光石だろうか。フードが深く被られているせいで顔まではよく分らないが、こんな場所に立っている時点で不審者だ。

他の職員に知らせたほうがいいのだろうか。

ユナが迷いを浮かべ視線を画面からそらした瞬間、異変は起こった。

男がなにかを召喚した。

弾かれたように画面に視線を戻す。

男が召喚したのは、灰色の狼だった。

「狼……！？　なんで、そんなもの！？」

悲鳴にも似た叫びが口を突いて出る。

自分の見間違いだろうか。しかし、何度見ても画面に映し出される光景は変わらない。

それどころか、炎色召喚術では不可能な狼が召喚されたことよりも奇妙なことが画面の向こう側で行われ始めた。

狼が、狼を吐き出している……！

その気持ちの悪い光景に、ユナは無意識のうちに口を手で押さえた。

ユナが画面の前で震えているうちに、数を増した狼が男の指示で散ってしまう。

ようやくユナは我に返り、手元にあったセキュリティブザーのスイッチを押した。途端、学園中に設置されたスピーカーから甲高いブザーがなり、学園中が割れんばかりの警鐘に包まれる。

マイクをひつつかみ、スイッチをオンにする。

「侵入者！　裏門から何者かが侵入しました！　侵入者は灰色の狼を召喚し、学園内に放った模様です！　生徒はただち避難してください！　体育館にいる職員は体育館で生徒の安全確保、体育館外にいる職員は生徒の誘導と灰色の狼を排除してください！　繰り返し、繰り返します、」

放送を入れ終わるとマイクのスイッチをオフにすることも忘れ、ユナは体育館の舞台袖にある小さな窓から外へ飛び出した。

外はたった今、自分がいれた放送とブザー音によって混乱に包まれた生徒でいっぱいだった。

「みんな、落ち着いて出来るだけ早く体育館に入りなさい！」

生徒たちに指示を出しながら、ユナは走った。

自分では体育館にいる職員は体育館で生徒の安全確保と放送を入

れたが、とてもあの大量の狼を体育館外で巡回中の職員だけで捌けるとは思えなかった。

少しでも多くの職員が狼の排除に回った方がいい。

空色のスーツのポケットには、五色の炎光石。あの狼がどれほどの強さかは分からないが、五色の炎光石があれば対処できるだろう。前方に灰色の狼の群れを見つけたユナは、走る速度をあげた。

五色の闘い、開幕？

けたたましく鳴り響く警鐘^{フザー}。その音に、五人全員が動きを止めた。
「何よ、この音？」

「セキュリティブザーだと思いますよお」

場の空気に似合わず、相変わらずの間延び口調のサージユだが、
声音は強張っている。マイペースなサージユが緊張感を持っている
という時点で、これは異常事態だ。

侵入者や学園内での火災など、緊急事態に鳴らされるセキュリティ
ブザー。三年間、フォース学園に通っているが定期訓練以外で
この音を聞くのは初めてだった。出来れば、一生耳にしたくないこ
の音。

「おい、どうするんだよ！？ てか、狼って何？ そんなもの、炎
色召喚じゃ召喚できないはずじゃ」

「とりあえず避難が先決！ 放送通り、裏門から侵入したんならこ
こにいるのはまずい！」

パニックに陥るルナの言葉を遮り、ケイがいつになく厳しい口調
で言う。

確かに、校舎は裏門から遠いとはいいがたい距離にある。近いと
も言えないものの、この場所でじっとしているのはまずいだろう。

「とにかく、校舎に入りましょ！ 施錠されてないはずだから」

レイシャの掛け声で、みんな一斉に一番近くにある入り口、校舎
の職員昇降口 通称裏口へ駆け出す。現在進行形でブザーが鳴り
響いている中、焦りや緊張、不安で近い距離にあるはずの裏口が遠
く感じる。

裏口のガラス扉を押し開け、滑り込むように中に入る。

学園戦争中は校舎が立ち入り禁止となっているので、いつもは生

徒や職員の声で溢れている校舎内も閑散としており、広く感じた。そのの広さと静けさが、よりいっそう不安を掻き立てる。

「これから、どうする？」

リステイが窓の外へ視線を投げかけながら問う。

「屋上に行ってみない？ 屋上から見たら、状況がつかめるかも」

「……今は状況把握が大切だからね」

冷静なケイの賛成を受け、レイシャたちは廊下を走った。

フォース学園は二階へ続く階段が東側、三階へ続く階段が西側、屋上へ続く階段が東側にあるので、二階から三階、三階から屋上へ行こうと思うと廊下を端から端へ走らなくてはいけない。

普段はなんてことのない廊下の距離も、今だけは途方もなく長い道のりに思えてくる。

走るたびに青色の炎光石が胸元で揺れているのが、自分の心を落ち着けるせてもの救いだっただ。大丈夫、いざとなったら炎色召喚でなんとか出来る。なんども自分に言い聞かせながら、校舎の端から端へ、下から上へ全力疾走する。

いつもならすぐに話に花が咲き、会話が途切れることのないレイシャたちも今回ばかりは無言で屋上へ走った。無言の空気が緊張感を増幅させているようで、この上なく息苦しい。

廊下に響く足音。自分のものと、あとの四人のものだけのはずなのに、誰か別の人のものが混じっているんじゃないかと、嫌でも思えてきてしまう。

屋上に着いた頃には、みんな肩で息をしていた。重い金属の扉に体当たりするようにして扉を押し開くと、まだ鳴り響くブザーがよりいっそう大きく聞こえた。それに混じって、混乱する生徒の声と生徒を落ち着かせようとする職員の声も。

「おい、あれ……っ！」

裏門の方を見たルナが、緊張と驚きが溶け合った声で叫んだ。

暗転する蜜色

「おい、あれ……っ！」

ルナの驚きと恐怖が入り混じった声で弾かれたように見れば、裏門のあたりから灰色の狼らしきものが学園中に散らばっていくのが確認できた。

放送でユナ教師が言っていたのは、この狼だったんだ！ でも、狼、いや動物の召喚は炎色召喚術では不可能なはず。どうして？

「レイシャ、こっちも！」

リステイの声に反対側、体育館や正門の方を見れば、灰色の制服を着た生徒たちが職員の誘導で体育館へ避難している。

狼もすでに生徒たちに迫っているらしく、あちこちで職員が狼を排除していった。

依然とけたたましく鳴り響くブザー。こんな警鐘がなくとも、事態は異常で緊急だった。

「どうしましょう。わたくしたちも体育館に避難した方がいいのでしょうか？」

「確かに、ここで五人孤立するのはまずいわな」

「でも、ここから出たらすぐにあの狼に襲われるだろうね」

ケイの冷静な言葉に重たすぎる沈黙が訪れる。

この緊急事態に生徒が五人だけ、この校舎に取り残されるのは何かあったときに危ないだろう。だが、校舎を飛び出せば狼の餌食になる。狼の能力が未知数なため、五人だけで数多くの狼に対処できるかどうかまったくわからない。

さて、どうするべきか。

選択肢なんて、ここに残るかここから出るかの二つしかないのに、それでもレイシャたちは脳をフル回転させて最良の道を導き出そう

としていた。

「ここから出ましょう。五人もいれば、なんとかなるって。それに、近くの先生に助けを求めることも出来るから」

レイシャが導き出したのは、ここから出るという選択肢だった。動かなければ何も始まらない。動き出さなければ、事態は好転も暗転もしないのだ。

「そうと決まれば早く」

カツンッ。カツン、カツンッ。カツンッ、カツン。

不意に、扉の向こう側から物音が聞こえてきた。一定のリズムで刻まれる、まるで足音のような。足音……！？

この状況で誰かの足音が聞こえる。それが意味することに、レイシャは蒼ざめた。

「レイシャ、どうしたの？」

「静かに。なにか、足音が聞こえない？」

全員が神経を扉の向こう側へ集中させる。

カツンッ。カツン、カツンッ。カツンッ、カツン。

一定のリズムは、どんどん大きくなってきていた。きつと、屋上へ続く階段を上る音だ。

「ねえ、まさか侵入者とかじゃないよね？」

リスティの声が恐怖と不安に震えている。明るい茶色の瞳にうつすらと涙が溜まっていた。

サージュが慰めるように抱き寄せるが、彼女の黒い瞳も不安げに揺れている。

「その可能性がないわけじゃない。でも、もしかしたら校舎を見に来た先生っていう可能性だってあるんだから」

不安を拭い去るために、わずかに残る希望を實現してくれと祈るように口に出してみたものの、

「校舎を見に来た先生の足音だったら、もっと急いでいるはずだ」

ぴしゃりとケイに否定される。もう、こんなときこそ冷静でいるとはよく言うけど、あんたは冷静すぎるわよつ。内心で悪態づくが、ケイの言うとおりだ。

この状況では、侵入者である確率の方が高い。

「おいおい、屋上じゃ逃げ場ねえぞ」

ルナの声の端々に焦りが見え隠れしている。

レイシャは今更、逃げ場のない屋上に来たことに後悔していた。しかし、今更後悔したところで遅い。

「みんな、構えて。逃げ場がないなら、乗り切るしかない」

肺の中のよんだ空気をゆっくり吐き出しながら、全身の筋肉に力を入れ臨戦態勢に入る。

持っていたサーベルは走るときに邪魔だからと塵に還してしまった。今から武器を召喚する余裕はない。だが、文字通り逃げられない。ならば、なんとしてでもこの状況を乗り切るしかない。

足音が大きくなるにつれ、背中を流れ落ちる湿った嫌な汗の量も多くなる。

五対の視線が突き刺さる中、重い屋上の扉はゆっくりと開いた。

暗転する蜜色？

この場の緊張感などまったく関係なく、ギイツとさび付いた音を立てて重い鉄扉は開いた。

扉の向こうから現れたのは、フードを目深に被った人物。背格好から男と判断できる。

「ふうん。校舎内に生徒はもういないと思っていたが、こんなところに残っていたか」

フードから覗く薄い唇が紡ぎだすのは、中性的でやわらかな声。

しかし、それに安堵することなどない。煽られるのは、本能的な恐怖。

全身から刺すように尋常じゃない量の汗が噴き出す。がくがくと膝が笑い出し、地面に根が張ったように足が動かなくなる。たった一言、言葉を聞いたただけなのに、身体が本能的な恐怖を感じて硬直してしまう。

「っ」

希望は薄かったが、それに縋るように期待を抱いていたために全身を駆け抜けた衝撃は大きかった。

この男の姿に見覚えもなければ、声に聞き覚えもない。つまり、この人物は教師ではないということ。改めて確認するまでもないのに、わずかな希望を見落とすまいとでも言うように一つ一つ確認してしまふ。しかし、それは希望を見出せなければ逆に絶望の淵へ追いやられるようである。

無意識に唇を噛んだとき、風が強く吹いた。反射的に足腰に力を入れ、吹き飛ばされまいとする。

その行動はフードの男も同じようで、腕を顔の前にかざす。しかし、いくら腕で風を防いだところで軽い布であるフードはふわりと

浮き上がり、はらりと重力に操られ落ちる。

今までフードで隠れていた顔があらわになる。

「あ」

男はしまったと言うように吐息にも似た呟きを零した。

が、レイシヤたちはそれを気に留める暇を与えられることなく、新たな驚愕に包まれる。

黒と白の中間をいく灰色の髪。硝子玉のような薄っすらと青を足した灰色の瞳。男と女ともとれる中性的な顔。実際に姿を見るのは初めてだが、その姿は何度も見たことがある。

しばらく世間や自身の脳内から忘れ去られていたが、先日のできた世間で騒がれることになった人物。

「モルテ・ダンテ……！」

レイシヤはただ掠れた声で男の名前を呟くのが精一杯だった。他の面々はそれをする余裕すらもないらしく、ただ恐怖と疑念の光で睨み付けることしか出来ない。

モルテ・ダンテ。

脱獄したばかりの重罪人が何故ここに！ それに、侵入者ってモルテ・ダンテだったの！？

脳内に疑問が生まれては消えていくが、それを一つ一つ問う余裕などない。

呼吸することすら許されないかのような、張り詰めすぎたこの空気の中では。それだけで人を殺せそうなほど鋭い殺気を向けられていては。

そして、現在進行形で世間を騒がせている重罪人はさして慌てた様子もなく余裕の笑みで中性的な顔を飾り付けて、ただ一言。

「どうも、こんにちは。わたくし私、この学園に復讐に参りました」

吐き出された言葉をレイシャたちが理解するよりも早く、モルテは地を強く蹴りレイシャたち五人のもとへ飛び込んだ。

暗転する蜜色？

「ひあっ！」

恐怖に引きつった悲鳴を上げながら、二手に分かれてぎりぎりのところでモルテの特攻を交わす。そして、その勢いのまま間合いを取り合流する。

レイシャたちが避けたために体勢を崩したモルテだったが、ゆったりとした動作で体勢を立て直しこちらへと視線を向けた。

両手には青黒い双剣。

「いつの間に……？」

サージユが驚きに声を上げるが、そんなのは自分の知ったことではない。

炎色召喚を行う際には色付きの炎、物体の想像、讃歌の三つがいる。その三つはどんな実力者でも省略することは出来ない。今、モルテが讃歌を唱えていなかったことを考えると、少なくとも双剣は今詠んだのではないということが分かる。

ってことは。

「隠し持っていたのか！」

先回りしてルナが叫ぶ。それに対して、モルテは薄っすらと笑みを浮かべるだけ。肯定しているのだろう。

モルテが纏っているフードの袖はゆったりとしたタイプだ。双剣の刃も薄く短いタイプであることを考えれば、召喚してからずっと袖に隠していたのだろう。

モルテが双剣を構えたのを見て、レイシャたちは改めて全身の筋肉に力を入れ神経をモルテに集中させる。

「レイシャ……」

リステイが不安げな眼差しを向けてくる。眼差しだけで、早く逃

げようよと訴えかけている。

背中を見せて逃げられるのなら今すぐそうするんだけどね、と困った表情で伝えるのが精一杯だった。

本当に出来ることなら、背後にある扉を開けて逃げ出してしまいたい。しかし、この実力者の前で背を向けるのは自殺行為だ。

さきほどの攻撃も、一呼吸反応が遅かったら切り裂かれていた。背を向けたら最後、切り裂かれて死ぬか、死にはしなくても重傷を負うだろう。

「つまらない」

「……へ？」

唐突に呟かれた声に思わず間拔けな声が漏れる。

何を思ったのか、双剣を塵に還す。さらさらと砂が崩れるように風に運ばれ、ほどなくしてその形は完全に消え失せる。

そして、コートのポケットに手をつ込み、銀白色の物体の入った蓋付き試験管を取り出した。

何……？ レイシャは試験管の中の物体を判別することができず、訝しげな視線を試験管に突き刺す。

「ストロンチウムだ。薬品倉庫から拝借した」

知っている物質名が出たことに、軽い衝撃を覚える。

モルテは試験管を掲げ、にたりと妖しい笑みを刻む。何か企みがあるというような、不気味な笑み。

「ここまでいえば分かるな？」

妖しい笑みが濃くなり、背筋を冷たい感覚が這い上がる。

ストロンチウム。炎色反応で赤を呈す物質。まさか……。

嫌な予感が全身を駆け上がる。逃げなくちゃ。早く、逃げなくちゃ。頭の中では警鐘が鳴っているのに、身体は動いてくれない。

スロー再生のようにゆっくりと試験管は落とされ、澄んだ音を立ててガラスが割れた。続いてポケットから透明な液体が入った小型の蓋付きフラスコが登場したかと思うと、それも地面に叩きつけられ割られる。液体が飛び散り、鼻を突くような匂いが広がる。多分、

アルコールだ。

嫌な予感の中へと確実に近づいていき、身体中の血がさあっと音を立てて引いて息が詰まりそんな感覚に陥る。

そして、流れるような動きで擦られたマッチに火がともりアルコールに引火した。ごおっと赤色の炎が燃え上がる。

「赤色の炎。遅しく燃えろ」

静かに呟かれた讃歌。それとは裏腹に爆発的に緋色の炎が広がる。屋上は、瞬く間に火の海になった。

「ひいつ」

本能的な恐怖から掠れた悲鳴が上がる。

今すぐ逃げなくちゃいけない。それなのに、足が竦んで動けない。まるで、蛇に睨まれた蛙だ。

緋色が今にも自分を呑み込もうとしているのにも関わらず、レイシャはそれをどこか遠くのように感じていた。

朝起きて、学園に来て、居眠りしそうになりながら講義を受けて、お昼にみんなと喋りながら甘いバナシエイク吸って、午前よりも強い睡魔と格闘しながら午後の講義受けて、まあ自分は帰宅部だからそのまま家に帰って、それで家族と雑談しながらご飯食べて寝る。そんなあたたかな日常にいたはずなのに、どうして、どこで、甘い日常は暗転してしまったの……？

暗転する蜜色？

「リオ、そっちの状況はどうだっ？」

体育館舞台袖。監視カメラの映像を見つめながら、ワーカー・アイウィンは近くにある無線を引く手繰るように取った。

「駄目だ！ 監視カメラを見ていれば分かると思うが、こいつらほとんど増えやがる！ 一匹一匹を始末するのはどうってことないがこの数じゃちよつとな……。この召喚生物おおかみを体育館に近づけないようにくい止めるのが精一杯だ」

無線の向こう側から漏れるリオ・アンダーソンの声はいつになく切羽詰っていた。きつと、無線の向こうでは苦虫を噛み潰しているかのような表情をしていることだろう。

「もつとこつちに人を回せないのか？」

比較的近くで狼の唸り声が聞こえたかと思うと、何かが風を切る音がそれを封じる。現在進行形で、無数の灰色の狼を始末しているようだ。

「……無理だ。最低限の人数を残して職員は出払っている」

不本意ながらもどうしようもない現実を告げれば、間髪入れず舌打ちが返って来た。

「おい、親父！」

「叔父さん！」

突然、噛み付かんばかりの威勢のいい声と共に実の息子と姪であるロイ・アイウィンとカナン・リベリスが舞台袖に飛び込んできた。二人とも、焦りの色を顔全体に浮かべている。

「どうした？ 緊急事態なんだ、大人しくして……」

「レイシャがいない！」

ワーカーの言葉を遮り、ロイが叫ぶ。その内容にワーカーの顔に

一瞬驚きの色が浮かんだが、すぐに一段と引き締まる。

「レイシャ？」

「三年のレイシャ・ロドン！ それに、レイシャといつも一緒にいる四人も体育館に避難してきてないんです！」

落ち着きのない様子で叫ぶカナンを落ち着かせるように、努めて冷静な声で冷静に言葉を紡ぐ。

「物凄い数の生徒が体育館にいるんだ、その中にいるんじゃないのか？」

なんせ、前代未聞の緊急事態。職員のほとんどは外に出払っていて生徒の点呼確認も遅れている。体育館にまだ避難できていない生徒がいてもおかしくない。

「いないんだよ！ 体育館を五周くらいしたけど、名前も呼んだけど、返事もなければ姿も見えない！」

ちらりと監視カメラの映像を見る。映し出されるのは灰色の狼とそれと交戦する職員の姿だけ。どこにも生徒の姿は見当たらない。本当に体育館にいないとなると、どこかの建物の中に入っている可能性がある。

誰かをレイシャ・ロドン他四名の搜索に向かわせようかと思ったとき、

「おい、ワーカー！ 校舎の屋上が燃えてるぞ！」

無線からリオの驚愕した声が流れてきた。

「校舎の屋上が燃えてるって……」

どういうことだ？ そう問う前に、リオは矢継ぎ早に状況を説明しにかかる。

「屋上から火の手が上がっている！ 侵入者か、もしくは侵入者と生徒がいる可能性がある」

監視カメラを睨みつけるように見れば校舎の屋上が映りこんでいるカメラには、しっかりと緋色の炎が

踊る様子が映し出されていた。

「親父、俺らちよつと捜して来る！」

唐突に投げかけられた声に振り向けば、なんとロイとカナンは舞台袖にある窓から外へ出ていた。

これには、ワーカーも驚きを隠せまい。

「何してんだ、お前ら！ 生徒は大人しく待機してろっ！」

「ごめんなさい、叔父さん！ わたしたちなら大丈夫ですから」

言うが早いか、校舎の方角に向かって駆け出す息子と姪。

「待……！」

呼び止めようとするが、既に二人は距離のあるところまで走って行ってしまっていた。

ワーカーは盛大に舌を打った。睨みつけているかのような鋭い眼光を映像に向ける。自然、眉間に谷のように深い皺がよる。

校舎の屋上にいるかもしれない侵入者。そこには五人の生徒もいるかもしれない。しかも、生徒が二人そこに向かってしまった。もう他に召喚生物の相手に向かえる職員も、屋上へ向かえる職員もない。

事態は最悪だ。

赤色が舞い散る

頭の奥がじんじんと疼き、くらりと目眩にも似た症状に襲われる。なんとか足を踏ん張り、倒れることは免れた。既に火の手はレイシヤ・ロドン達のすぐ傍まで迫っている。誘うようにちろちろと緋色が伸び、自分達を呑み込もうとする。身体が芯から火照り、口の中の水分がほとんど蒸発してしまった。視界がぼんやりとし始め、睨んでいるはずのモルテ・ダンテの姿が揺らぎ始める。

火による熱に加え、焼かれないためにも五人が団子状態になっていることによる暑苦しさと意識が朦朧とし始めている。このままじや、火に吞まれる前にこの熱で倒れるのが早そうね……。心の奥底でそんな冷静なことを思い、微苦笑した。

一刻も早く火を消すかこの場所から逃げなくてはいけない。ここを取るべき行動は、後者だろう。火を消したとしても、ここから逃げられなければまたモルテと交戦するはめになる。それに、これだけの火を消せる水を召喚出来るとは思えない。

でも、どうやって逃げよう？ このまま普通に扉を開けて逃げるのは不可能だろう。自分達が背を向ければ、モルテは即座に飛び掛ってくるはず。せめて、目くらましでもない。しかし、目くらましって言ったって何が……。

不意にユナ・ネーア教師の言葉が頭をよぎる。

あった。とっておきの目くらまし。成功するかは半々の確率だが、やってみる価値は十分にある。

「みんな、もう少し我慢して」

小声で四人に向けて囁く。

「水蒸気が立ち上ったら、全力で逃げるわよ」

四人が小さく、でもしっかりとうなずいたのを確認してから、レイシヤは青色の炎光石を小さく打った。モルテに青い炎が見えないよう、なるべく手を背中で隠す。

手の平の上で燃える、決してモノを焼くことのない青色の炎。
レイシヤは静かに瞳を閉じる。

代わりに無防備になったレイシヤを守るように、ルナとケイが半歩前へ踏み出す。

レイシヤの様子を不審に感じたモルテが片眉を吊り上げ、涼しげな表情をわずかに崩す。ばれたか、とケイは熱い汗に混じって冷や汗を流した。

想像するのは、小さくて軽い氷の粒。実技の授業中ではとうとう成功しなかったが、失敗を繰り返した分学んだこともある。

なるべく小さく。なるべく軽く。なるべく多くまんべんなく。

ふわふわとする意識の中で、鮮明に映像を描く。
イメージ

「青色の炎！ 冷たく凍れっ！」

讃歌を叫ぶと同時に、燃え盛る炎の上に大量の氷の粒が出現する。
氷の粒はジュワアツと一瞬にして水蒸気へと昇華し、あたりを白く煙らせる。

企みが成功したという喜びに浸ることもなく、レイシヤは即座に身を翻し錆び付いた扉を体当たりの要領で強引に開けた。

幾分かひんやりとした空気が頬を撫で、表面の熱を浚っていく。

「あつ、レイシヤ！」

「……あつ」

階段を下りようとしたレイシヤは今階段を上ろうとしている見知った姿を見つけ、反射的にストップした。

「カナン、ロイ！ どうしてこんなところにいるの？」

体育館に避難していなくてはおかしい二人がいることに、戸惑いと疑念を薄紫色の瞳に浮かぶ。

「レイシヤ、早く！ 僕はモルテを倒したんじゃないで騙しただけなんだから、早く逃げない！」

ケイが無理矢理レイシヤの手を引っ張り、転げるように階段を駆

け下りる。そのまま止まることなく、二階へ下りる階段に向かい廊下を全力疾走。

「俺達はお前らの姿が見えないから捜しに来ただけど、お前らはどうして屋上に？ 屋上には誰がいるんだ？」

「端的に言つと侵入者 あの前ルテ・ダンテがいます」

ロイの質問に短く答えるサージユ。

「モルテ・ダンテ！？ あの前獄犯が？ どうしてこんなところに？」

サージユの返答に驚きを隠せないカナンが矢継ぎ早に質問するが、サージユは分からないと言つように首を横に振つた。

二階へ下りる階段に辿り着いたとき。突然、ザクリツとスコップで地面を掘つたような音が響き、サージユの身体が斜めに倒れていった。

赤色が舞い散る？

「サージュ……？」

サージュの身体が斜めに傾き、スロー再生でも見ているかのようにゆっくりと階段を転げ落ちていく。

「う、あ……っ」

右肩には一本の赤い矢。それと同じくらい真紅^{あか}い血が灰色のフォース学園指定の制服を染め、散る。

「サージュっ！」

その場にいた全員が状況を呑み込んだのは、彼女の身体が踊り場に叩きつけられてから一呼吸した後だった。駆け下りるといふよりは飛び降りると言う勢いで階段を下り、リステイが抱き起こす。

「サージュ！ サージュ、大丈夫？ ねえ、サージュ！」

「リステイ、揺らすなっ！ 出血が酷くなる」

肩の傷口から、どくどくと赤色が溢れてくる。

首から提げた黄色の炎光石は階段を落ちる衝撃で砕けたのか半分以下の大きさになり、小さな破片が胸の周りについている。

「白色の炎。強く止める」

ケイが素早く白い炎を出し、真っ白な包帯を召喚する。

「ケイ、サージュは大丈夫なの！？」

「落ち着いて。矢が刺さったくらいでは死なないから」

医者の子であるケイが矢を抜き、てきぱきと処置をしていく。

その横で、レイシャは階段の上に佇む人物を睨みつけた。

片手に赤色の弓矢^{アーチェリー}を携えた、モルテ・ダンテ。あの炎の中を突っ切るにはもう少し時間がかかると思っていたのに。

「サージュになんてことするのっ」

「なんてこと……？ 僕はこの学園に復讐に来たんだ。復讐 すなわち、全生徒と全職員の抹殺。生徒一人、しかも殺したわけでもないのにぐだぐだ言うな」

「な……っ」

サージユを矢で打ったことに対してなんとも思っていないモルテに、カアツと熱い血が上ってくる。リスティヤルナ、ケイ、サージユまでもきつくモルテを睨みつける。が、当のモルテはそんな視線も心地よいと言わんばかりに涼しい顔でレイシヤ達を眺めている。

「てめえっ！」

誰よりの先に動いたのはカナンだった。

「青色と黒色の炎！ 深く穿て！」

階段を二段飛ばしで駆け上がりながら、両手に青黒い槍を召喚する。

「カナン、待て！ 止めろっ！」

ロイが手を伸ばして制止しようとするが、遅い。

「あああああああ！」

カナンは叫び声を上げながらモルテの胸板に槍を突き立てたかのように思えた。がくん、とカナンの動きが不自然に停止する。槍は胸板に刺さる寸前でモルテによって止められており、モルテはそのまま槍ごと手を捻ってカナンの手から槍を奪い取る。

「あ、くそっ」

必死に手を伸ばして槍を取ろうとするが、モルテから視線を逸らすのは自殺行為だった。カナンの視線がモルテから一瞬外れる。その隙に、モルテは矢を番えた。そのまま、無駄のない動きで矢を放つ。

「うぐっ」

「カナンっ！」

至近距離で矢を放たれたカナンは真っ赤な血を噴き出しながら、背中から落ちていく。

「チッ」

ふわりと浮いた身体が硬い地にたたきつけられる前に、ロイが抱きとめる。

「黒色の炎。きつく縛れ」

背後からルナの讃歌。ちろり、とモルテの影が小さくうごめき、次の瞬間に黒い縄に変化する。

「なに……っ」

一瞬、反応が遅れたモルテ。そのまま絡め取られるように縄が巻きつく。

「ルナ、ナイス！」

「おうよ」

「今のうちに逃げるよ！ サージュ、立てる？」

サージュが強くうなずいたのを確認して、再び階段を駆け下り疾走する。

モルテはしばらく動けない。が、いつ拘束を解いて追いかけてきてもおかしくない。今のうちに来るだけ遠くに逃げなくちゃ。そして、サージュとカナンを早く手当てしなくちゃヤバイ。

サージュはともかく、カナンは応急処置さえ出来ていない。現在進行形で赤い液体が溢れ、灰色の制服をどんどん侵食していつている。

はるか前方に、一階へ続く階段と非常口。全員で行動するのが一番だが、仕方ないか。

赤色が舞い散る？

「いい？ 今からわたしが言うことをよく聞いて」

肺から淀んだ空気を吐き出し、自分自身に言い聞かせるように言う。

六対の肯定を示す視線がレイシャへ向けられる。

「三手に別れましょう」

「三手に？」

肯定の視線はすぐにその言葉の真相を図る、鋭いものに变化する。「そう。まず、怪我人は非常階段から外へ出て早く手当てを受けて残りの四人のうちの二人はここでモルテを引き止めて、残りの二人は階段から外へ出て教師を呼びに行く」

毅然と、己の動揺と恐怖心を必死で押し殺しつつ意見を口にする。本当はこのまま七人で行動した方がいい。それに、モルテを引き止める二人の命が危険に晒される。だから、あまりおすすめはできない。が、七人で行動していたんじゃ怪我人の手当てがいつになるかは分からない。怪我人は離脱して教師の元へ一刻も早く行かなければならないし、そうすればそちらに敵がいかないう、引き止める役もいる。そして、誰か教師を呼びに行く役も。

「モルテを引き止めるって、囷のようなもんじゃん。そんなことしたら、確実に殺されるだろ」

ルナが、お前正気か、とでも言うような非難の眼差しでレイシャを見つめる。その視線を受け止めて、なおもレイシャは毅然と意見を言い連ねていく。

「別にモルテと闘えって言ってるんじゃない。さっきのルナみたいに、拘束して動きを止めるだけでいいから。怪我人を先に逃がすには、絶対囷が必要なのよ」

「それは分かったけど、でも、なら四人でモルテを引き止めてもいいんじゃないのかい？　それか、怪我人に同行するとか」

走りながらも的確に欠点を指摘するケイ。心のどこかでその冷静さに感心しつつ、それでも三手に別れなければならぬ理由を説明していく。

「それに、確かに怪我人だけじゃ危ないけど、狼がうじゃうじゃいる外を団体で動くと目立つ。それに、三手に別れないとフェイントが使えないでしょ」

フェイント……？　口に出さずとも、場の空気がそんな疑問を発する。それを黙殺し、大分大きくなってきた非常階段を見つめる。

「ゆっくり、考えている暇は、ありません。モルテがいつ、追ってくるかも、分かりませんし……」

サージユの息が荒い。ただ単純に全力疾走しているから、という理由だけではない。先ほど付けられたばかりの傷が痛むのだろう。

それに、じんわりと真っ白な包帯に赤色が混ざり始めている。

ちらりとロイに抱えられたカナンを見れば、こちらは素人目にもかなりヤバイ状態だということがわかる。辛うじて意識はあるが、目の焦点は定まっていない。そして何よりも、出血が酷い。

「いーいつ？　怪我人は先に非常口から逃げて！　カナンはロイがお願い」

「オッケー！」

普段は使われていないために錆びつきが酷い非常口を開け、怪我人二名と付き添い一名を送り出す。この瞬間をモルテに目撃されたらヤバイ。

その気持ちだけで、引き始めた汗がまた量を増す。横目でおそろおそろ後ろを確認するが、モルテの姿は見えない。とりあえずは成功かな。

「囹役はどうする？」

「ここはあたしが引き受ける」

誰が直接重罪人モルテ・ダンテと対峙するか、そんな問いに間髪いれずリスティが答える。

その茶色の双眸に、怯えはない。確固たる決意。先ほど怯えていた少女はもう、ここにはいない。

「リスティが？」

「この中で一番炎色召喚が上手いレイシャと体力があるルナは、先生を呼びにいつて」

「でも、一番上手いレイシャは残った方が……」

「うん。ここから先生を呼びに行くまでに何があるかは分からない。だから、何があっても対応できるレイシャは行つて」

声も決意も瞳も揺らがない。一拍の呼吸。その後に。

「任せたよ、リスティ、ケイ」

「うん、任せられた」

ちらちらと三階へ続く階段の方へ送っていた視線が、ついにモルテの姿を捉えた。

「レイシャ、行くぞっ」

最後に一度、リスティとケイの背中を瞳に焼き付けて、ルナと階段を駆け下りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6674/>

世界は七色に輝いて

2010年10月8日14時14分発行